

特201

106

三田村鳶魚編

西鶴  
輪講  
好色一代男  
巻の五

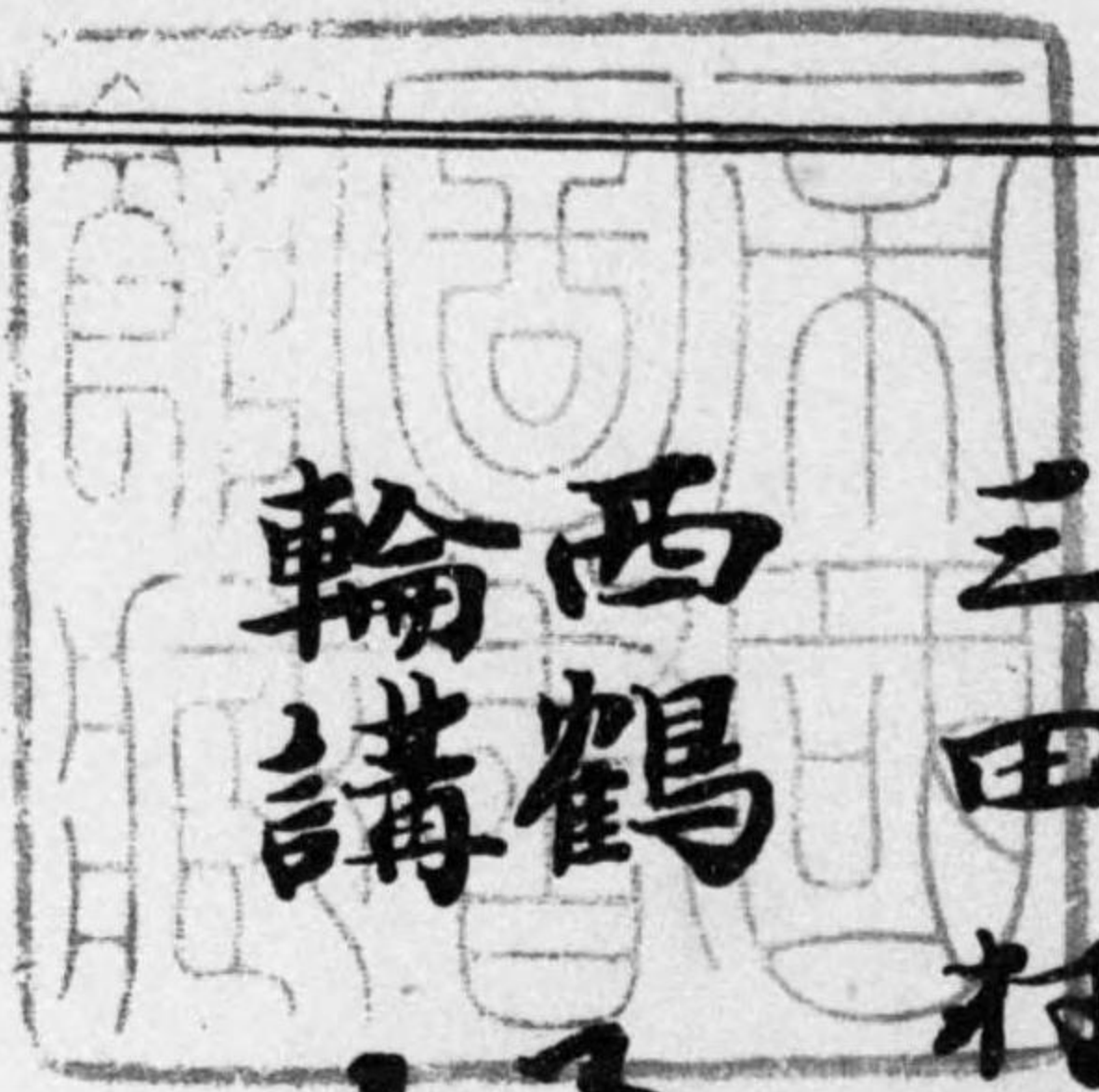


始





特201  
706



西鶴  
輪講

三田村  
鳶魚編

好色一代男  
卷の三

東京  
春陽堂版





西鶴 輪講 好色一代男 卷三

林 若樹、野々村蘆舟、三田村鳶魚、  
山崎樂堂、木村仙秀、吉田里子、  
服部普白、鶴岡春盞樓、柴田宵曲、

好色一代男 卷三



好色一代男

卷三目錄

- 二十一歳 戀のすてがね
- 二十二歳 京手かけ者の事
- 二十三歳 袖の海の肴賣
- 二十四歳 下のせき遊女の事
- 二十五歳 是非もらひざる物
- 二十六歳 一夜の枕物ぐるひ
- 二十七歳 大はらざこ寐の事
- 二十八歳 集禮は五夕の外
- 二十九歳 越後寺泊り遊女の事
- 三十歳 木綿布子もかりの世
- 三十一歳 坂田の濱女惣嫁の身ぶりの事
- 三十二歳 口舌の事ふれ
- 三十三歳 縣神子かまばらひの事

戀のすて銀

世にすめば、袴肩衣も、むつかし、人の風情とて、朝毎に髪ゆはするも、こゝろに懸れば、十徳にさま替て、昔しは男山、今こそ、樂阿彌と、八幡の、柴の座といふ所に、たのしみを極め、東に三十萬兩の、小判の内藏を造らせ、西に銀の間、枕繪の、襖障子、都よりうつくしさを、あまた取よせ、誰おそるゝもなく、或時は、はだか相撲、すゝしの腰絹をさせて、しろさはだへ、黒き所までも、見すかして、不禮講の、ありさま、是成へし、此人もとは、若狭の小濱の人也、北國すぢの、舟つきのたはれ女、敦賀の遊女、のこらず見捨て、今上がたにすみぬ、世之介勘當の身と成て、よるべもなき浪の聲、諷うたひと成て、交野牧方、葛葉にさし懸り、橋本に、泊れば、大和の猿引、西のみやの、戎まはし、日ぐらしの、歌念佛、かやうの類の宿とて、同じ穴の狐川、身は様々に、化するぞかし、此所も、賣子、浮世比丘尼の、あつまり、朝にもらひ



ためて、夕に、みなになし、のこる物とて、古扇あみ笠引かぶり、放生川をわたりにて、常磐といふ町に入て、竹一村の奥に、ちらりと、お寺扈從の、みえける、爰はと里人に、たづねければ、歴々のあそひ所と、かたる、さては、うたひはかたし、我ふり捨てと、らうさい、一拍子あげて、忠兵衛が、りに、しおり戸より、聲もおしまずうたへば、耳かしてき人、たゞならぬうたなり、それをと、やうすを見るに、公家の、おとし子かと、おもはれて、賤しきかたちに、あらず、つかひ崩して、親にうとまれ、こらしめのために、かゝるなりさまぞと、京近くに、すめる、人の目もはつかし、おりふし、楊弓はしまりて、おのく、やうく、朱書くらいに、あらそはれしに、或御かたの、道具を借て、取弓取矢にして、四本はつれず、一筋は、切穴に、通れば、座中目を覺して、なを所望するに、數あり、去御方は、琴をなをして、爪のなきを、ほいなく、おほしめしけるに、かすかなる、ふところより、うすむらさきの、服紗物より、瞿麥の、紋所ありし、爪出して、若御指に、あひ申べきやと、たてまつりける、

是ぞ泥中より、玉の光かと、おもはれて、其後言葉も替て、しばらく、此里にととめ、明日京都へ、女をかゝえにのぼり侍る、いざ同じ道にと、誘へば、有増やうすも、覺侍る、そもく、京はさよく、少女の時より、うるはしさを、良はゆげに、むしたて、手に指かねを、さゝせ、足には、革踏はかせながら、寝させて、髪はさねかづらの雫に、すきなし、身はあらひ粉絶さす、二度の喰物、女のしつけ方を教え、はたに木綿物を著せず、是に、したつる事ぞかし、おのつからの、女にはあらず、これに、そなはりし女は希也、當世女は、丸顔櫻色、萬事目ずきにと、御幸町の、甚七かかたに行て、西國の御用と申なし、年の比は、はたちより、二十四五まで、勝れて姿繪にあはすと、申わたせば、此ば、觸なして、其日七十三人、或は乗物にて、はした、腰もと召連、おもひくの、著ながし、もろこしの花いくさも、是成へし、中にも柳の場々の、縫箔屋の、おさつといへるを、捨金百五十兩、世之介にも、七條の笠屋のお吉、おとらず抱させて、宿にも十分一の外、満足させて、けふ吉日の、都がへり、萬の自由みやこなれや都





○服部 「世にすめば袴肩衣もむづかし」は何かあるのかどうか知りませんが、儀式張つたことは面倒だから髪を結ふといふやうな人の嗜みもしくなつて、十徳を著るやうに——法體になつたのでせう。「昔しは男山」これは「われも昔は男山」といふ本歌があります。男山の近所の八幡でせうが、柴の座といふところがありますか。

○三田村 林 山崎 知りません。

○若樹追記 山城名勝志卷十八の終りに「長福寺、在八幡山下、藤澤五代拾變上人開基、今山下柴ノ座ト云所ニ拾變上人六字ノ名號アリ、長八間幅七尺五寸、康永三年八月七十三歳云々、今芝座惣堂ニ安レ之」とあり。

○服部 「三十萬兩の小判の内藏」は三十萬兩入の寶藏でせう。「西に銀の間」は銀襖の間だらうと思ふ。「枕繪の襖障子」これは外にありますか。古く根岸のある人の家に、かういふ襖がありましたかね。

○三田村 併し座敷には無いだらう。



○服部 寢所にはあるさうですな。これは西鶴の發明かも知れません。「すゝしの腰絹」これは裸相撲を取る時の容體でせう。「小濱の人」は樂阿彌のことです。この後は世之介自身のことです。「人國記」には

若狭

當國の風俗は、人の氣相和する事なく、意の體なり、昨日は睦かりつる中も、今日は疎なりて其非を擧る風なり、下をして、上を欺、己が科を正されては、却て人の不法のやうに云なせり、取廻懶發なる故、指當の辯舌、一花の氣勢はあれども、根の遂る所なし、三方郡は、江州の風にひとしとぞ、

按に當國は、北に向ひ海濱をうけ、尤山を負ふといへども、只一重なる國ゆゑに、自人の心根とほりがたく、風俗薄平なり、寒國なり、

あまり結構な國ぢやありません。これの中にも強情な氣風のやうに書いてある。舟つきの女にも飽きが来て、上方に來た。前卷の終にありました通り、世之介は勘當になつたところから、身邊を考へて諺うたひの袖乞になりました。橋本は八幡の下の橋本でせう。「大和の猿引」は何かありませんか。

○山崎 猿の産地なんです。



人倫訓蒙圖彙所載

多のこすひ

○林 人形遣ひでせう。

○山崎 大黒舞みたいなものぢやありませんか。

○三田村 伊豫あたりへ行くと、恵比須様の姿を入れて、正月だつたかに廻るのが、今でも残つてゐるさうです。

好色一代男

○服部 「守貞漫稿」には猿引は紀州の産だとあります。

○山崎 つまり紀州とか、大和とか、あゝいふ山林の多い處から猿がよく獲れる、それを猿引が使ふんぢやないですか。

○服部 お話によれば、不斷猿と交際してゐる連中ださうです。「夷まはし」は？



○木村 それが根本で、それから轉じて人形廻しになつたんでせう。

○林 「人倫訓蒙圖彙」に「津の國西の宮より出るゆゑに夷舞しと號す、西宮のさしむかひ海をへたて、淡路島にも此流有、むかしはゑびすの鯛を釣給ひし所を仕形にして春の始に出けるとなり、今は能のまね踊のまね色々をつくす、浮沈ある音聲一風ありてかくれなし、世に傀儡子といふは是なり」とあつて畫があります。

○鳶魚副書 女の裸相撲は色里三所世帯京の巻、近松の關八州繫駒にもあります。孰れも特殊の人の格別な慰みであるが、延享になつて江戸で見世物となり、明和には大流行を來し、天明になつて、風俗上に面白からずとあつて禁止になつた。

○服部 「日ぐらしの歌念佛」

○木村 賤民らしいですな。

○三田村 歌念佛の方は「竹豊故事」に、日暮林清、同弟子林故、林達などがはやつたことが出てゐます。日暮は歌念佛の方の太夫でせう。

○若樹追記 寶永七年板増補松の落葉卷二字治加賀掾作四條河原涼八景の中に「歌念佛、さるほどに世の中の人間の目、かの姿を見せんとて花開いて示す正に眞の智識たり、そのかみは鷲の御山に法の

道、今は修験のなかに漂ふ、ア、あさましやこの身はさて、沖こぐ舟の舵を絶え、いつか到らん涅槃の岸、心の綱にまつはれて、色に引かれ香に迷ひ、なさけの竹の枝茂き、鐘の響かりんちりりんと音添ふる」とあり、歌念佛の文句は大凡これで察せられる。



人倫訓蒙圖彙所載

○服部 「狐川」は山崎の上にある渡しです。「古扇あみ笠」これは譚

を流れてゐる川で、放生亭といふものがあつて、八月十六日に放生會をするといふことです。竹一村の奥にちらりとお寺扈從「これはわかりません。

○三田村 お寺の稚兒でせう。お寺扈從のやうな姿をしてゐるから、さういつたんぢやありませんか。樂阿彌は樂坊主と同じことでせう、法體になつた隠居といふ意味でせう、俗つれくにも「家榮え



たる樂坊主」とあります、又た慶長見聞集には氣樂な乞食坊主の名を樂阿彌といひ、東海道名所記にも樂阿彌が居ます。

○木村 これは樂阿彌の住家でせう。それに「お寺扈從」と断定してゐるから、をかした感じがするんですね。

○服部 歴々の遊び所だといふので、諺ではいかんといふのでせう。「我ふり捨て」といふのは何か唄の文句でせうが、何にあるのか存じません。「忠兵衛がより」といふのは、當時かういふうたひがゝりがあつて、それを遣つたんでせう。「公家のおとし子か」といふのは形容が少し仰山のやうですが世之介はかういふ男だから、品がよかつたものと見えます。が、當時は準禁治産いふ形で、大分ひどいなりをしてゐるから、「京近くにすめる人の……」といふやうに、世之介の心持か、作者が第三者として見たのか、かういふ批評めいたことを挿んだのだと思ひます。

○山崎 はじめの「東に三十萬兩の小判の内藏を……」のところは、諺曲の「邯鄲」から取つたのです。「東に三十餘丈に、しろがねの山を築かせては、こがねの日輪を出だされたり。西に三十餘丈にこがねの山を築かせては、しろがねの月輪を出だされたり」、あれです。

○林 頭を剃るといふことを云はずにちやんとわかるのは、俳文一流の書き方であらうまいですね。

○服部 名文ですな。

○木村 この無禮講のところは、「太平記」にある、日野資朝卿が酒宴に事寄せて鎌倉を滅ぼす計畫を立て、當時公卿が武家の共に談すべき人々を集めて、無禮講といふものを始めた、「其交會遊飲の體見聞耳目を驚せり獻盃の次第上下を言す男はるぼしをすきて鬢を放ち法師は衣を著せすして白衣になり年十七八計なる女のみめ形美しくはだへことに清らかなるを廿餘人編單計をきせて酌をとらせられたれば雪のはだへすきとほつて太掖の芙蓉新たに水を出したるに異ならず」とある。そこをそつくり持つて來たらしいです。

○林 「人間不禮講」といふ繪本を師宣が書いてゐます。夫れは昔の放屁の巻や男根競を師宣が書き改めたものですがね。「北國すぢの舟つきのたはれ女」これは北國沿岸の意味ぢやありませんか。

○服部 さう取つた方がいゝかも知れません。

○野々村 小濱は舟著場で、大分繁昌したことは、「若狹郡縣志」にも見えて居り、足利時代には、外國の船なども時々來たやうです。

○木村 松前から大阪へ行く船は、皆彼方へ廻りますからね。昔はどうも太平洋岸よりは、日本海岸の方が繁昌したらしい。



○三田村 「よるべなき浪の聲」は謡曲の何にありますか。

○山崎 ざらにある文句で、特にどれを取つたとも云へますまいな。

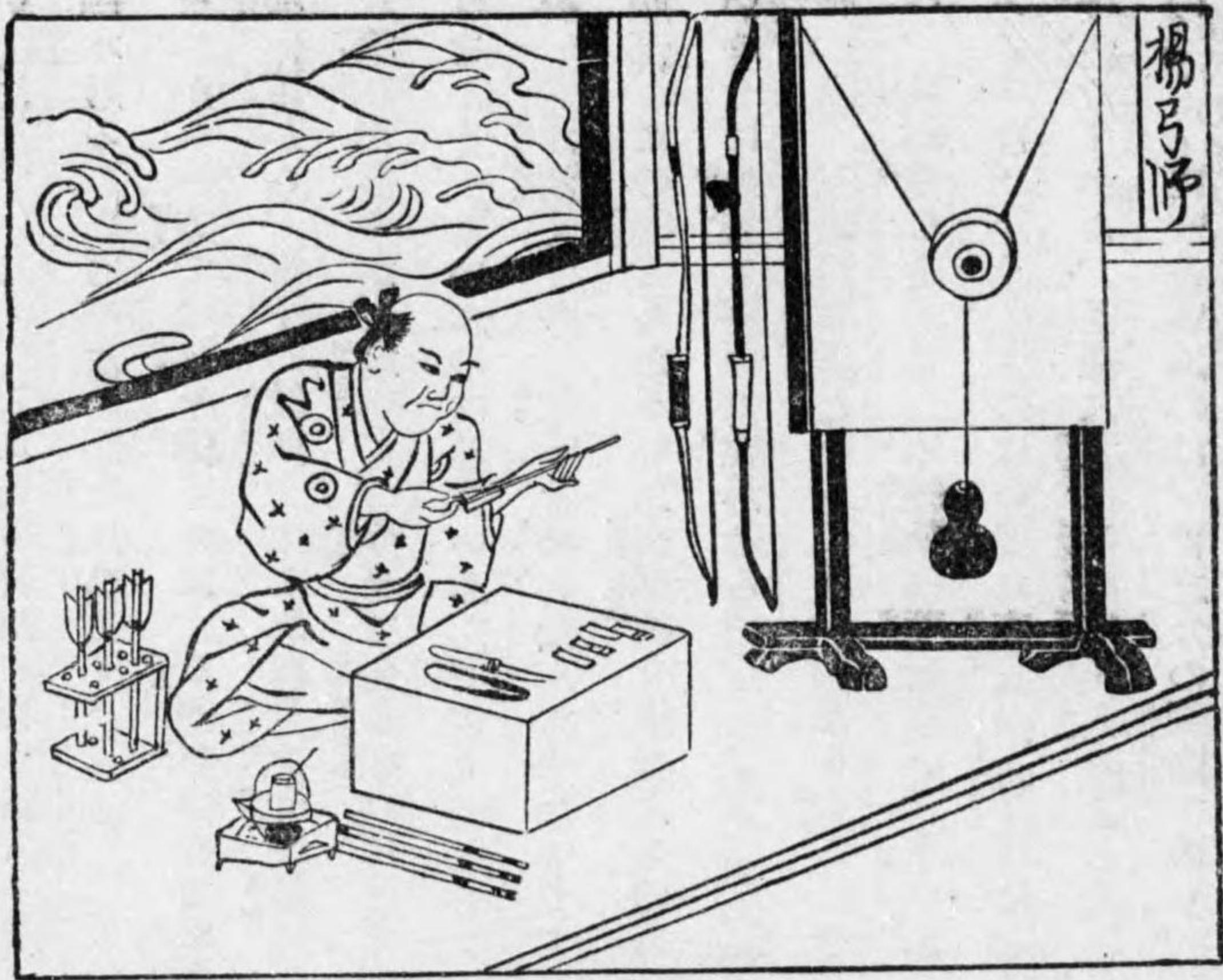
○野々村 「東に三十萬兩」の方は「邯鄲」に違ひありませんか。

○三田村 「忠兵衛がゝり」といふのはよくわからないが、弄齋のうまいやつでもあつたんでせう。

弄齋は人の名だといふ説と、肺病だといふ説と二つある。唄ふ聲が「勞瘵」やみのやうなといふ見立から来たといふのです、後のものだが、傾城伽羅三味線にも「某頼奉る主人ろうくたる病にもとづき……ほとんどのどくの山ほとゝぎす、なげぶし、らうさいにてやあらん」などと書いてあります。

○林 名前の方がよさうだな。

○若樹追記 我ふり捨てゝと弄齋一拍子上げては元禄十六年板松の葉卷二に雲井ろうさい「山の端アイノテ、いかなる夜も人 アイノテこそしらね、アイノテ、ねやはなみだのふちとなる、アイノテ、よもやなげかじ、アイノテ、かなはぬとても、アイノテ、さだめなきこそうきよなれ、アイノテスガ、キチラシわれふりすてゝ一聲ばかり、いづくへゆくぞ山ほとゝぎす」とあります。これを當時の名人忠兵衛張りで唄つたのでせう。



人倫訓蒙圖彙所載

○吉田 古い小唄本には皆弄齋と書いてありますな。

○木村 隆達、弄齋と續く方が工合がい。

○林 本文のあとにも出て来るが、この「すて銀」といふのはどういふんですか。

○三田村 前に遣る金です。支度金ですかね、あれをいふ。

○服部 手付金ですか。

○三田村 まあさうですが、遣つたのは返らない。それで捨銀のわけです。

○服部 何とも書いてありませんが、世之介は中へ呼び込まれたんでせう。一方では楊弓を遣つてゐる。二百本のうち五十本中るのが朱書です。やうく朱書くら



い」といふんですから、あまり熟練しない人々と見える。「取弓取矢」は存じません。が、四本持つて四本射ることぢやないかと思ひます。「一筋は切穴に通れば」これはむづかしいところなんでせう。それから一方では琴を弾くのに、爪が無いので残念がつてゐるのを、もしお指に合へばと云つて、穢い懐から、撫子の紋所——これは世之介の紋でしたね——のついた爪を出した。こんな男にこんな嗜みがあるかと驚いて、今まで乞食扱ひにしてゐたのが、言葉も替へて其處へとどめた。——「京はきよく」といふのはどういふんです？

○林 「水清く」の「水」を略したんぢやないですか。

○服部 この頃でもかういふ美顔術を遣つたものらしいですな。「指かね」は指環ですか。足の荒れないうやうに足袋を穿いて寝かせる。「さねかづらの雫」はくせ直しに使ふんでせう。洗粉は小豆の粉を使つた。二度の喰物といふのは、あまり太らぬやうにする用心でせう。いろ／＼女の行儀作法を教へ、肌が荒れるから、木綿物は著せない。今いふお鬘ぐるみです。禿立から太夫になるのと同じことですな。かういふのはいづれ高貴の弄びになる女でせう。それから當世流行の顔つきで、丸顔櫻色ですから、西鶴は大に健康的美人を認めたと見えます。「目すき」といふのはわかりません。この「……に」といふのは、世之介の判断であり、その蘊蓄を傾けて話したところです。「御幸町の甚

○七「は口入でせう。「西國の御用」はよくあるやつです。「姿繪に合す」これもわからない。

○三田村 持つてゐる姿繪に引合せて、選ぶんでせう。

○服部 この語法は少しむづかしいですな。「おもひ／＼の著ながし」きらびやかなものでせう。「もろこしの花いくさ」は玄宗皇帝ですか。

○三田村 戦國時分の話でせう。吳國の宮殿で、吳王細腰を好むといふ、あの邊の話です。

○服部 「柳の馬場」は何か必要なんでせうか、花に對して使つたんでせうか。「捨金」は先刻お話のあつたやうなものです。この終のところは意味がよくわかりません。「抱させて」まではいゝが、抱へさせてどういふのかわからない。甚七のところへも満足するほど金を遣つて、今日こそ吉日と都へ歸つたといふだけの話でせう。長らく流浪してゐたのが、かういふ自由なことになつたといふので、「みやこなれや都」と讚美した言葉で結んだんだらうと思ひます。

○山崎 十分一といふのは口錢ぢやありませんか。

○林 さうでせう。こゝはその外にも金を遣つたんですね。

○三田村 「目すき」は見取りでせう。

○山崎 さう思ひますな。前に人工美人製造法を書いてあるが、なか／＼その條件に適合した女は無



い。それで現在では先づ丸顔櫻色をよしとし、強ひて條件を立てずに、これならまづよからうといふ女を、直覺的——印象的に選り出す、といふんぢやないですか。

○服部 選取りですな。

○林 博文館本には、「目すき」の「す」をわざと、「つ」に書替へて「目つき」としてある。

○鳶魚副書 詰改一表、矢員二百本なり、中る所五十本以上は朱書、百本以上は泥書、百五十本以上は金貝、百八十以上大金貝といふ（近世世事談）、此矢數を詰改場の看板にしるす、三都共に詰改場數ヶ所ありしこと、元祿版の三合一覽に見ゆ。

○服部 取弓取矢は如何ですか。

○林 大體先刻のお話のやうでいゝんでせう。

○三田村 取矢は四本を一手にするんですね。凡矢二本稱一手、二百本謂百手（雍州府志）、中古より二本を四本に改め、二百本を五十度に射ることになりたり（楊弓射體蓬矢抄）とあります。

○服部 江戸と上方では、楊弓も少し違つてゐるさうですな。江戸のやつは太鼓と的が置いてあつて矢が外れゝばドンといふ。上方のは的に穴があいてゐる。

○三田村 それが切穴でせう。

○鳶魚副書 繫格臺謂棚格、中央有小穴、是謂喜利穴（雍州府志）

○林 「和漢三才圖會」に畫がありますよ。

○服部 五十が朱書、百以上が泥書、百五十以上が金貝、百八十以上が大金貝とありますな。

○木村 金貝といふのは螺鈿みたいなものですかね。何だか定齋屋の看板のやうだけれども……。

○服部 金貝と云ふのは厚い箔のやうなもの、或は薄金の板を云ふやうに思ふ。金板に文字を切抜いたのでは無いでせうか。

○林 この時分琴爪に紋をつけることがあつたか知らん。

○木村 贅澤ぢやありませんか。例へば光琳が竹の皮へ蒔繪をするといつたやうな……。

○林 「指かね」昔は指環は「指の輪」といつて指かねとはいふまい。爰は指環でなしに、指を細くする爲に、金を嵌めるんぢやないですか。足袋を穿いて寝るのも、足を大きくしない爲ぢやないかと思ふ。

○山崎 纏足的だ。

○林 指金はまあサツクみたいなもんでせうね。

○山崎 どうもこゝは美人製造の實用器具らしいですね。或は京都へ行つたら、今でも指金は残つて



ゐるかも知れない。現在使つてゐなくても、昔のやつがですね。

○三田村 「猿源氏色芝居」に「ゆびがねこそいれね手いたい事させねばつまはつれも産のまゝ」とあり、「艶道通鑑」にも「太き指にベ金はめさせ無理ほそりにいためいれ」とあります。「野傾旅葛籠」にも太夫の仕立を書いたところに「手に指かねさゝせ」とある。御説の通りでせう。

○山崎 上方ぢや、足袋を穿いて寝ることは思ひますがね。親の死目に會へないといつて……。

○林 それや東京でも云ひますよ。之はつまり無性と贅澤とを戒める方から來てゐるのでせう。

○山崎 「さねかづら」は？」

○野々村 美男かづらのことです。

○吉田 あれば髪を直すと云ひますね。

○服部 粘りがありますから、乾かない間だけは、ねつとりして居ますが、乾くとさらりと伸びて、つまり癖をなくす。即ち癖を直すと云ふのです。

○木村 この西鶴の當世顔はよくいゝものゝに引かれてゐる。

○林 「はたちより二十四五まで」といふと、少し年増の方ですな。これは縫箔屋の娘ですか。

○三田村 否、職業婦人です。縫箔屋とか、鹿子絞の家とか、さういふところにかういふ女がゐた。

○木村 笠屋もさうでせうね。

○山崎 世之介にも笠屋の方の一人あてがつたんですね。

○服部 併し楊弓と、紋のついた琴の爪だけで、これだけにあるつくのは少しえらいですな。

○山崎 だから「戀のすて銀」と云つてあります。

○林 甚七なんていふのは、當時名高い男がゐたんでせう。——このあたりの文章はうまいけれども少し窮屈ですね。それだけ味があると云へばある。

○三田村 上方ではよく西國大名といふことを云ふが、考へて見ると大きな大名は大概西の方で、東には大したものはないんですね。奥羽まで來れば又大きいのがゐるけれども、これは又少し遠過ぎる。

○宵曲附記 狐川に化けることを云へる句あり。共に寛永頃の作なるよし。

水も ばけ氷とななるや狐川 良次  
狐川 水さへばける氷かな 春可

○仙秀追記 西鶴の「日本永代藏」卷三に、「歌念佛の日暮しといふは、昔伏見の御上代の時、諸大名の御成門軒を並べてかじやき、金銀珠玉を鑿め、何れの工匠か珊瑚を削りなして、紅梅の枝に春



を移し、五色の浮雲をしづかに、龍はさながらに動き、虎はそのまゝかける勢ひ、見ぬ唐土の二十四孝を越前の殿の御門にありくと、美形を彫物に、この清らかなる事言葉にも述べがたし、五十五萬石三年の物成これに入けるとなり、彼の京の鉦たゞき孟蘭盆の比勸進にまはりしが、朝日影御成門にうつろひしに、これに氣をとられて詠めけるに、………それに心をとられ、これに目をよるこばし、更に秋の日のならひにて、はや暮れておどろき、願以此功德空袋かたげて都に歸るを見て人申しならはして日暮坊と、そのするく今に名だかし………」とある。

○野々村追記 「若狭郡縣志」の文は、左の通。

遠敷郡今富庄之海濱、謂之小濱。(中略) 昔日阿納尻村之邊有市屋、而北西兩國之商舶至斯處。又其西海畔有市屋、他邦海賈之所來也。其處西津名、今西津郷是也。爾後移市店于小濱、至于今、海陸之商賈常聚會于茲。寔不易繁榮之地也。海東諸國記、日本圖若狹國中、記小濱津名矣。云々。

又外國船の來た事は、「若狹國守護職次第」、「海東諸國記」、「南蠻寺興廢記」などに、所見があります。

袖の海の肴賣

火の當見に、小倉の人、のぼられしに、此里の花も、おもしろからず、誘ふ水にまかせて、鵜殿野の蘆も、まだ筆に見なして、旅のこゝろを、書つゞけて行に、左に天野川、磯嶋と、いへるにも、舟子の瀬枕、しのび女有所ぞかし、右の方は、西行假の舎りと讀れし、君の跡とて、榎の木、柳かくれに、わびしき、一つ庵のこせり、同じ汀つゝきに、三嶋江といふ里も、昔しはうかれ女の、すみしとなり、なを行末に、神崎中町に、しほど、白目などいへる遊女の出し所也と、みぬ昔日も、なつかしく、浪は次第にあらく、しほさかいより小早に乗うつりて、風うれしく、備後の國、鞆といふ所にあがり、名にさゝし、花鳥八嶋花川といへる、髪長を、定もあへず、そこへ寝て、何かたるへき、戀のもと末もなく、夢もむすばすありしに、日和見に、起され、帆をまく音、酒うる聲、さも聞かはしき、ちきり、其夜あふて、其曉の名残、しかと、顔さへ見しらず、御ゑんがあらばと、あゆみの、板をあげて、取かぢになをして



はや二三里も出て、世之介鼻紙入、取のこして、ふかく惜しむをきけば、花川といへる女に、起請を書せ、指しぼらせて、名書の下を染させけるに、と申せば、油断もなき所に、めいよの女郎たらしと、舟ばりたゝきて、大笑ひ、行に程なく小倉に著て、朝げしさをみるに、木綿かのこのちらしがたに、茜裏を、ふさかへさせ、どしの帯前結ひに、平髻ふとく、すべらかしに、結びさげ、盤切の、あささをいたゝきつれて、我からぬらす袂、まくり手にして、浮藻まじりの、櫻貝、鱭いとより、馬刀石王餘魚取重て、大橋をわたりて、おもひくくに、道いそくをきけば、是なん、此所の肴賣、内裏、小嶋より出る、たゞ、じやうと申、伊勢こと葉に、やゝといへり、所によりて、替りたる事笑しくて、なを尋ければ、いづれにても、肴をかへば、草履をぬぎて、奥座敷にも、あがるとかや、浦風のかよひて、汐ふくみし、脚布も、折節は興あり、或日伴ひし人と棚もなき舟、飛がごとく、磯をおさせて、下の關いなり町に行て、詠やるに、女郎は上方の、しなしあつて取亂さず、髪さげながら大形は、うち懸、物いふ

にすこし、なまる所なをよし、今のはやり物、長崎屋のにな川、茶屋の越中、たばこ屋の藤浪、かゝらば此三人、太夫の中にも外はなくて、尋常なり、内證さけ三八と申侍る、揚屋町に行ば、日來の大臣、よろしく、さばき置るゝとみえて、大座敷わたし亭主内義が入替り、けいはく、數を盡し、上方のお客さまに、何をかひなひたる事も、咄しの種になど、申、とやかくの内に、一所におてき御さつて、銚子もうごき出ける、いまだ古風やめず、一度くにおさえて、酒ぶりかたし、膳をすゆる事、たびくにしてやかまし、是を馳走とおもへばや、無理まじりに、歌の三味線の、只やかましくなつて、取じめなく、おのづからかうした、座配開し、女郎寝まはせば、男は酔て、前後をしらず、何かたるとおもへは、友とちに、あふ事のせんさく、其いひ分仕懸、どの床も、替る事なし、人とは、物をもいはずせずはしく、氣のつまる事にぞ、五七日噪ぎの内に、のこらず、密夫となれる、さすがおろか成、やりくりにて、後はあらはれて、むごく見かきられて、爰をも、暇乞なしに上りぬ



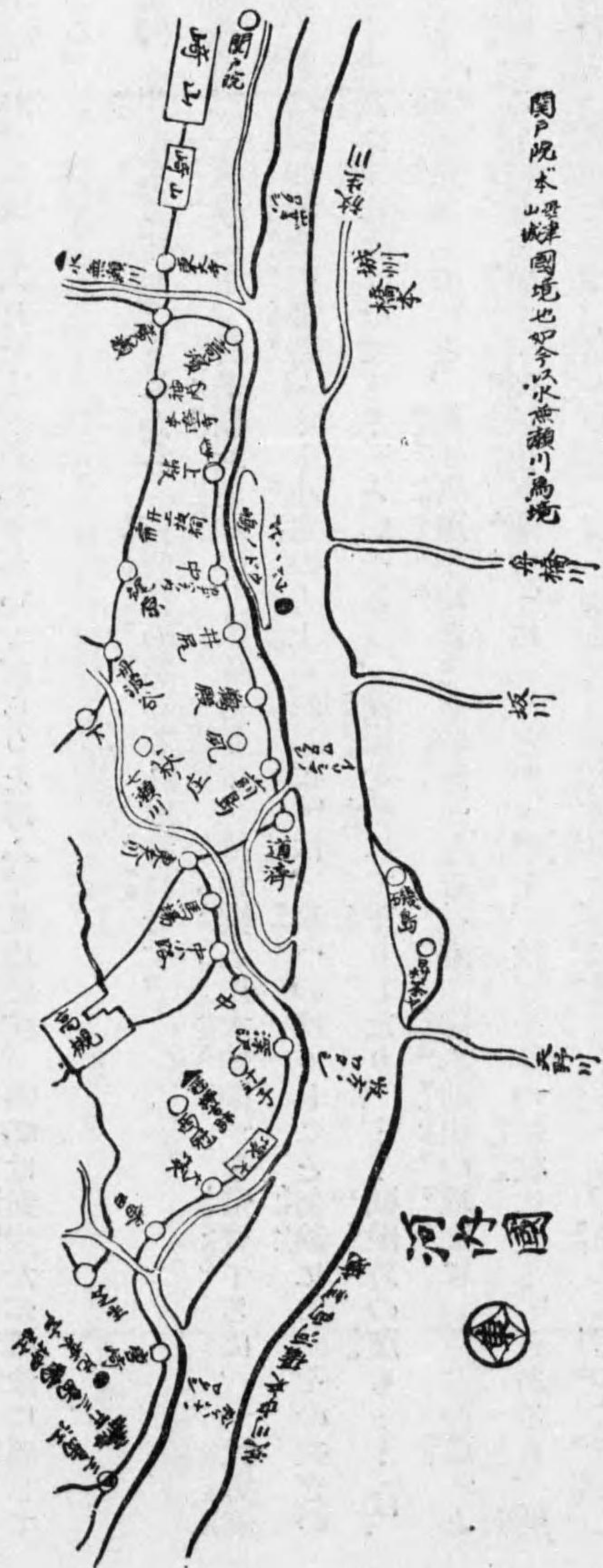


○山崎 書出しが已にわかりません。「火の當見」といふのは何です？

○林 活字本の當字かも知れないと思つたんですが、原本にもちやんとさうある。

○山崎 丁度小倉の人が上つて来て、又向うへ歸るので、世之介も誘はれるまゝに一緒に行くことになつた。鶴殿以下、道筋の名所を一々擧げてあります。天野川は何處ですか。

○鶴岡 淀川の傍でせう。



河内國の淀川と其の國境也今以て其の流るる地



○林 これは地圖を入れた方がわかりがいゝだらうと思ふ。此處です。磯嶋は對岸だが攝津に屬してゐる。

○山崎 川の名ですか。それから「西行假の宿」これは江口です。

○仙秀追記 挿繪にと、林若樹氏所藏の、天保七年板「攝津國名所大繪圖」を借覽するに、一代男卷三、袖の海の肴賣の條の、「……小倉の人上られしに」は、京へのぼりしこと勿論にて、その次ぎの「……誘ふ水にまかせて……」といへるは、淀川を船にて下りしなり。……鶺鴒野の蘆も……は、「……筆に見なして」と、蘆手書蘆手繪などを聯想せしむべく、即ち前出の地圖に「うどの蘆」と小書せるも注意を要す、「傾城色三味線」に「うどの蘆を、けしやうの細杖に……」とあるも、所謂名所の名物なれば、諸人の玩びしなるべし。天野川を左に見て……も、流れに従つて下行したるが分明になる。遂に三島江を経て、ゆくゆく神崎につき、「浪は次第にあらく、しほさかひよりにて、海路備後の鞆に至りしなり。」

○山崎 「白目」は何ですか。

○林 「新選歌枕」に江口の遊女で、嵯峨天皇の御思ひものだとあります。

○鶴岡 「白目考」といふものがあります。

○山崎 さうすると「しろど」もハクジンの類ぢやなしに、個人の名前ですな。「しほさかひ」は潮の替るところ、小早は舟の名でせう。「髪長」は髪を長くしてゐるところから、さう呼んだものと思ふ。

其處ではいゝ加減に女をきめて、そこへに寝たが、かうした首尾の整はない戀で、夢もろくに結ばない間に、早や、日和や風の都合で、舟を出すとて起される、まことに忙しい契りである。「あゆみ」は舟へ乗り移る歩みの板です。さて舟が出てから、世之介が鼻紙入を忘れたのを残念がるので、そんなものをどうしたんだと訊くと、昨晚花川といふ女に起請をかゝせて、指を切らせた……。

○林 これは切るんぢやない、突かせる方です。

○山崎 血起請ですか。さういふ、暢氣に落著いてゐられない場合にも、そんなことを遣つて來るのは、優秀な女郎たらしたと云つて、大笑になつた。

○林 「火の當見」はどうです？

○三田村 不知火の火を見に行くんぢやないですか。

○林 併し筑紫へ行くんぢやない、此方へ來る場合だから……。私は或はヒノトミ（丁巳）の當字ぢやないかと思ふんですがね。それなら延寶五年かにあるんです。まあわからないけれども、一説とし書いとしてくれ給へ、好い解説さへ出ればいつでも撤回します。



○鶴岡 「袖の海」は何處ですか。

○服部 小倉の前の方でせう。

○林 あれは洞海即ちクキの海といふんぢやないですか。

○服部 西鶴は九州の方を知らないんで、いゝ加減に書いたところがあるやうに思ひます。

○山崎 私の宅に袖の浦屏風といふのがあつて、大分賑かな船著の遊女町らしい畫を描いてありますが、あれは何處か知らん。

○若樹追記 唐船等の著いた九州博多の湊を袖の湊といふが、袖の浦は袖の湊のことではないか、袖の湊ならば遊女等も居て能く適合しますが……。

○三田村 「火の當見」は大文字の火でもありませんか。

○山崎 それだと大分結構だけれど、季節が違ひませう。

○野々村 あれは七月の十六日ですから。

○三田村 「髪長」は伊勢言葉ぢやありませんか。

○野々村 併し伊勢言葉は坊主だからいけません。

○林 小早といふ舟がありますか。

○三田村 あります。

○林 「しほさかひ」は地名ぢやないですか。

○山崎 淡水と鹹水の堺でせう。

○服部 川口から海へ出るところですな。

○山崎 「舟ばり」は舟べりですか。源平時代だと舟ばたを敲くといふところだけれど……。

○柴田 舟梁ぢやありませんか。其角にも句があります。

舟 ば り を 枕 の 露 や 閨 の 外 其 角

○三田村 それだらう。

○山崎 「木綿かのこのちらしがた」は鹿の子を散らした型を置いてあるんでせう。「どしの帯」はわからぬ。

○鶴岡 ふんどしぢやないんですか。

○林 さうぢやない。元祿五年板の「萬買物重寶記」の末の諸國名物調寶記の「攝津の分」の處に、

「どしおりのおび」といふのが出てゐる。前後の品名から押してこれは大阪の産物です。どんな織物か分らないが、多分小倉織みたいな安いものでせう。



○山崎 櫻貝から以下は魚と貝の名を並べたので「内裏小島より出るたゝじやう」

○林 「たゝ」と「じやう」とは別なんぞせう。原本は字の間に・が打つてある。

○山崎 伊豫へ行けば、オタ、といふ肴賣が今でもあるんですがね。句讀があるとする、「じやう」はどうなりますか。

○野々村 或はこの「じやう」は、私の郷里でいふ「嫁じやう」「婿じやう」などと同じ「じやう」ぢやありませんか。何しろ隣の國ですから、そんなことかも知れない。

○林 伊勢で「やゝ」と云ひますか。

○服部 只今彼地へ問合せ中です。

○山崎 「所によりて替りたる」は例の歌を踏まへてゐる。表面は肴を賣つて、裏面で賣色をする女があつたんでせう。そこで「浦風のかよひて汐ふくみし脚布も折節は興あり」と云つた。「棚もたき舟」は萬葉集にも出てゐる「棚なし小舟」でせうね。それから下關へ行つた。こゝで關係するなら先づこれ／＼の三人であらうと云つた。三八といふのは遊びに行つた家ですか。

○三田村 三十八匁ぢやありませんか。

○鳶魚副書 畠山箕山云、三八は太夫と天神との間の職なり、此名目當時斷絶すと云へども、今大阪

の太夫といへるも、是と同じ心なり、今大阪に昔の太夫を停止たるにより此職を太夫といへり、喜多村筠庭云、寶曆頃は七十六匁なり、三八は五三の例にていへば三十八匁としらる、延寶の頃、大阪の太夫の價とみゆとあるので、同じやうに太夫とは云つても、大阪のは京のよりもお値段が安かつたと見える。三八は太夫と天神の間と云へば江戸なら格子のことなのだが、大阪には格子といふ名稱はない。京には延寶九年版朱雀遠目鏡に、かうしとあるが、明暦元年版の桃源集には格子といふ名は見えない。

○服部 少し高くはありませんか。

○三田村 併し嶋原の太夫はもつと高いですよ。

○服部 山崎 二十四匁ぢやありませんか。

○三田村 三五といふと三十五匁です。

○服部 大阪川口から小倉迄海上が百三十六里あるんですが、先生輒だけで遊んでゐますね。

○鶴岡 内裏といふところがあるんですか。

○服部 今は大里と書いてゐます。製糖所があります。この「飛がごとく磯をおさせて」といふのは、西鶴が御存じないからでせう。あの海峡を越すのですから、「磯をおさせて」といふやうなところぢや



やない。

○林 「棚もなき」といふのはどういふんです。

○三田村 胴の間の無いやつぢやありませんか。江戸でいふ猪牙のことだらうと思ふ。

○服部 それにもう一つ、小肴ばかり持つて来るのも、西鶴が知らないせぬぢやないかと思ひます。

○野々村 併し私の方の夕、はあまり大肴は持つて来ませんな。

○山崎 伊豫のもさうです。

○服部 こゝは色どりでいろ／＼な名を並べたんでせう。

○服部追記 毛吹草卷四、豊前産物の條に「内裏馬刀、外ヨリ勝タリ」とあり。

○野々村 この遊廓は今も下關にあるやつですか。

○服部 さうでせう。彼處へは前のお話の、北廻りの舟が寄りますから、繁昌したわけです。

○木村 「髪さげながら……」とある。これは後の寺泊のところでもさうですが、西鶴は京大阪の風俗を標準として見てゐる。「曾根崎心中」にもお初が徳兵衛を天満屋の店先で桐櫛の下へ隠すところがあります。京大阪では、私娼といふやうなものでも桐櫛を着てゐる。さういふところから、こんなことを書いたんぢやありませんか。

○三田村 これは髪を下げてゐて、桐櫛を着てゐるからをかしいんでせう。

○木村 併し西鶴は事實見たんぢやないでせう。話を聞いて書いたんでせう。

○鳶魚副書 「おすべらかし」と「さげ髪」について、園池公功君の教諭を求めた、懇な同君は圖入の返事を與へられました。それを其の儘に書き附けて置きます。

おすべらかし

これは昔御所内のおつぼね方が平生いつも結つて居られた髪で、御所内では此の髪を「お中」といふ、これにうちき、緋の袴といふみなりであつた。

結ひ方は、總髪を後になで上げ、髪の内側に、つとらと稱する厚紙を入れ、それに髪をかた油で張りつけて形を整へるもので、型紙は左圖（イ）の如きものである。





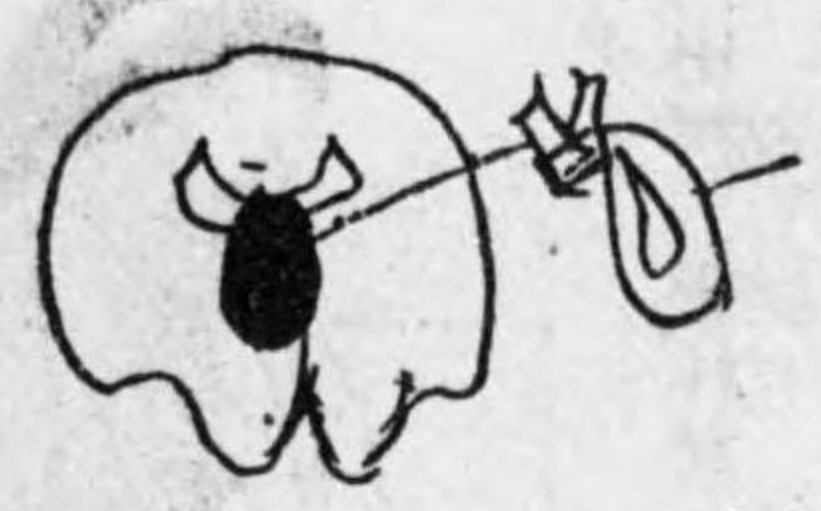
而して、その型紙の終るあたりを、一束にして結び、(ハ)なほ五節の舞姫の如く長かもじの足し髪をして長く引く場合には、ところどころを結び留める。

これは、俗稱椎茸鬘と稱するもので、おつぼねの下に仕へる人々が晴の場合に、これに結び、緋の袴を用ゐるもので大體次の如きものがある。



結び方は、やはり、おすべらかしと同じく、髪の裏側に、つとららを張りつける。但し形は(H)の如く、髪を梳き上げて、型の如く張りつけた後は、下で結ばずその毛を又上に、とかしあげて

頭の上で、(イ)(ロ)圖の様に、結び留めて下げたもので、その根元には、かざりとして丈長を用ゐる。



圖の横。鬘のへさお

附、おさへ

この髪に結ぶ階級の人々は、平生は、おさへと稱する髪に結つて居るので、此の髪は晴の場合のみに限る。これは、さげ髪と同じ結び方で只垂れた毛を根元に、丸めて結んで置くもので、おつぼね方も、お宿下りなどの折には、此の髪に結ぶ。

○三田村 大阪は米取りがあるんで、諸國のいろんな話を聞く便宜があつたでせう、元祿——寶曆頃までは大阪が日本の中心ですからね。

御殿女中のおすべらかし (天璋院様御附某老刀自口授)



好色一代男



○山崎 この大臣が不斷よく届いてゐると見えて、大きな座敷へ通し、亭主や内儀が入替りに来て盛んに世辭を使ひ、上方のお客様には何か田舎びたことでも、なんかといふ。そのうち一緒に相方が来て、酒ぶりを古風に堅く遣つてゐる。無理を云つたりする言葉に歌がまじつて、自然座敷も亂雑になる。

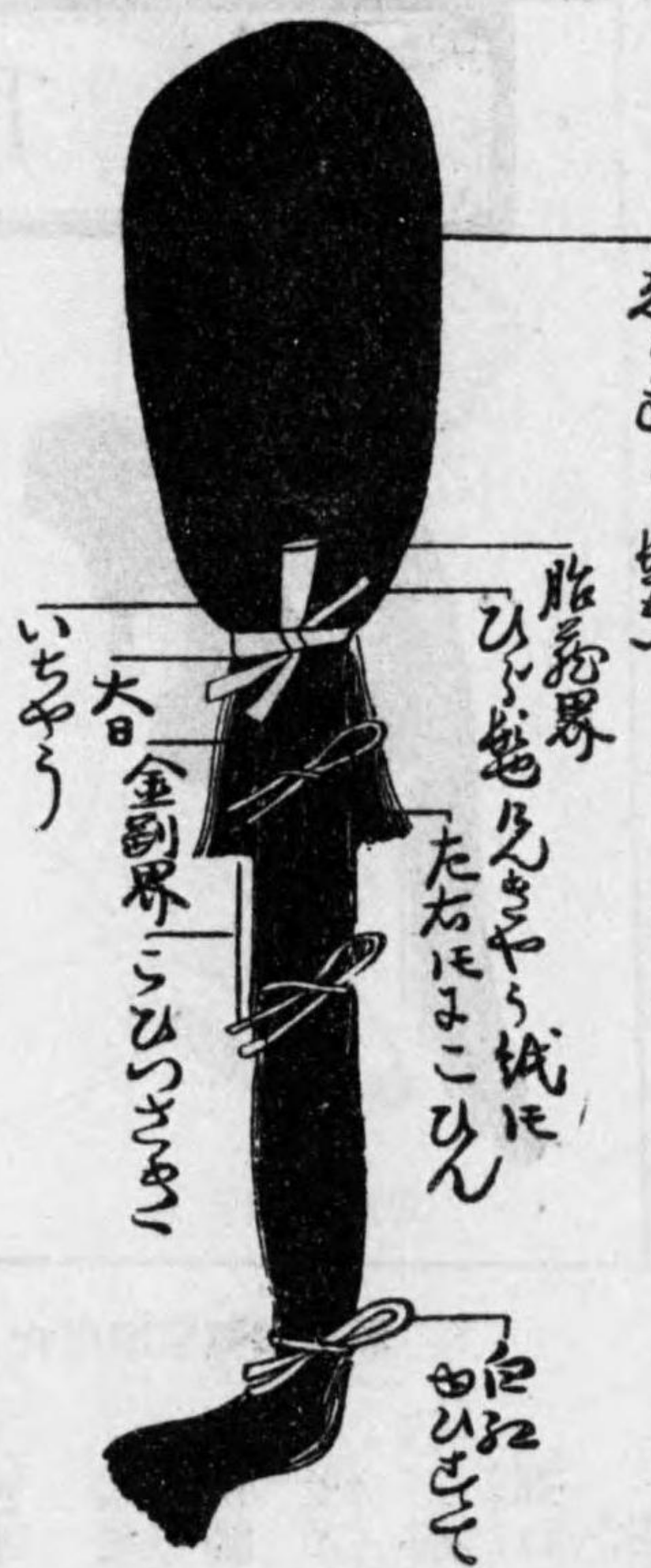
「まはせば」は廻しを取るんでせうか。  
○服部 さうかも知れません。  
○三田村 寝てゐてあしらふんぢやないか。御先へ御免蒙る。  
○林 「何かたる」は床の中か。



(記實重女) 髪げ下人婦家武

○三田村 それだから造作なくマブになれる。  
○山崎 座敷では古風に堅いらしいが、寝るとなると、床の中まで嚴重なことはない。  
○三田村 嚴重は野暮で褒めたことぢやない。飽きくする。

長も下けみかけ



水島流假粧眉作口傳所載

○服部 氣のつまる、窮屈な方でせうな。  
○三田村 この土地の女どもは、どれも同じやうなことで、起きて話を聞いたところで、面白いこともない。「寝てまはす」はあしらふやうな意味だらうと思ふ。金を餘計遣ればよく廻るといふことがあつたやうです。

○副書 寐てまはすのまはすは二階廻し、箱廻しなどの廻しでせう。  
○山崎 末社なんかにも「廻す」といふことをよく云ひますね。こゝ

で世之介は皆密夫になつたけれども、あまり利口でない遣方で關係をつけたもんだから、後にはだんぐりばれてきて、どの女にも見限られてしまつた。

○服部 世之介が皆の色男になつたんですか。

○木村 この文章ぢや判然しませんね。

好色一代男



○林 「是を馳走とおもへば也」と活字本にはなつてゐるが、私はこれは「や」ぢやないかと思ふ。原本には句讀が切つてありますか。



載所彙圖蒙訓用女

○吉田 この「や」がむづかしいんですがね。普通の「也」よりは少し小さいやうでもあるが……。句讀は切つてあります。

○山崎 こゝはやはり「おもへばや」でせう。

○三田村 マブといふ言葉は「金山の掘口をまぶといひます」(諸分店風)

「掘ば銀の眞福にとりつく」(手管三

味線)「今三間掘れば眞膨にあたるの一丈先はきほひにつくのと」(一夜船)佐渡の金山へさしかゝり……掘子藝財の族格子にとりつきいやくまぶたをしさまとほむる(好色由来揃)などいふやうな用例があつて、もとは金山言葉でせう。青すだれ(元禄十六年版)に「眞金吹山やめき盛る

らん」とある眞金吹の約だらうかと思ひます。だから元來の意味は、金になる客のことです。吉原伊勢物語に「金によりおもひふりしてよひ中を人はこれをやまぶといふらん」しらざればよひ中みては人ことにまぶといひつゝとひし我しも」とある。然るに「御前義經記」に「はし女郎のあきつぼねにてあがりぜんをくひそめてより密夫といふことをはじめぬ」とあるのは、意義が違つてゐる。これは深いといふ方から轉じたものでせうか。「傾城百人一首」(元禄十六年版)に「間夫とはあやまり也、常に横切をまぶと云、是に浮名の立事なく忝色もなし、互に思ひおもはれ心を千々に碎をば忍びおとこと云り、是大切の倅にし

下髪



載所答問諺世

て命を捨ててもあやかりもの也」とあるのは、「御前義經記」の誤を正してゐることになる。寛文版の「吉原袖鏡」には「近年遊女のはらむ事かたのごとくのまぶ内證にありと見ゆ、いにしへはなかりし事とぞ」とあつて、これは遊女と婿家の亭主との關係を指摘したのか、金故のことか、又眞に情人だつたのか、とにかくこんなところから紛らはしくなつたんぢやないかと思ふ。密夫の本義か



ら轉じて、現在いふやうな情人のことをいふやうになつたのは、恐らく元祿以後からせう。

四〇

○林 こゝはマブの如く取扱つてゐるんぢやないか。

○山崎 一人々々に就いては、やつぱりマブといふわけなんでせう。

○若樹追記 マブといふ詞で最も古い文献と思はれるのは細川幽齋の天正十五年の九州道の記の四月廿九日の條に「石見の大うらといふ處にとまりて、明るあした仁間といふ津まで

風流のついで



載所彙圖蒙訓用女

行に云々、それよりやがて銀山へこえて見るに山吹といふ城、在所の上にあるを見て

これは嘗て京大の新村博士よりの教示であります。

是非もらひ 著物

かり衣、しらぬ道すちを尋て、中津といふ所を過て、いかなる方に、舍るべきたよりなく、其夜は辻堂にあかして、明日の日並を待しに、遙なる里はなれに、矢倉太鞍の聞え侍る、是は藤村一角が、旅芝居と聲立てよひぬ、看板をみわたせば、都にて目を懸て、羽織などくれし、はやしかたの庄七といへる、役者是にたよりて、あらましを語れば、定なき世のならひ、今歎き給ふ事なかれとたのもしく、一ふしあそばしたれば、口すぎとおもはれて、舞臺勤たまへと、著あろしの長袴、足もとも定兼、品之丞が出はのうたに、人なみに頭をふつて、間をあはすこそおかし、色ふかくて、身のほどをしらず、若女方をそゝのかし外の勤の、邪魔なして、又そこをも、追出されて、不思議の日數へて、けふ大坂の、うき世少路に、我が事忘れぬ、人ありと尋行に、花屋、たばこさきり、駕籠昇の、西隣に、何して世をわたるともなく、柿そめの暖簾かけて、女の一人暮せり、是は乳をのませしうばが妹なり、此乳母も、二三年跡に、は

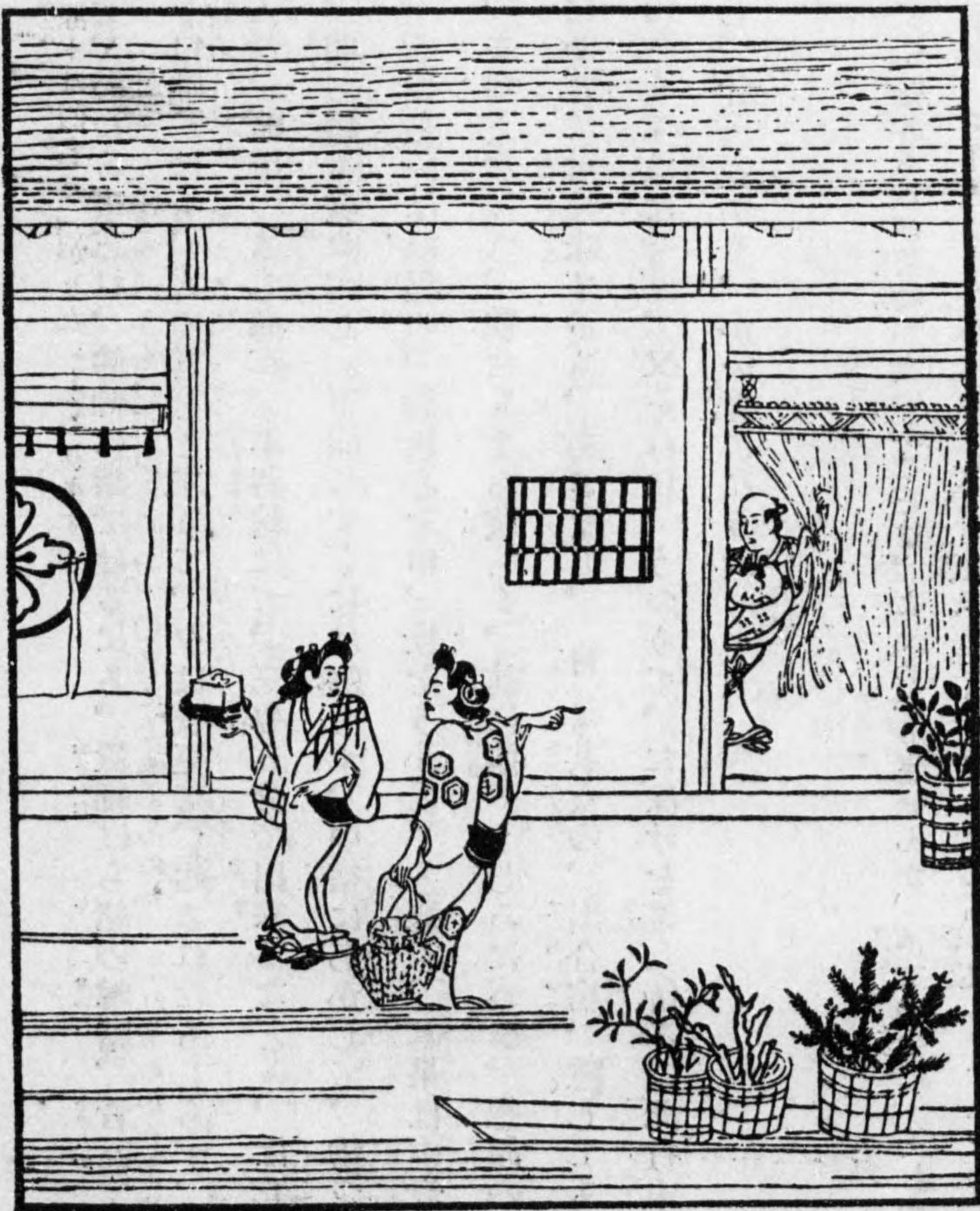


かなくさりぬ、されども、むかしの御恩とて、あしからず、もてなし奉りける、其暮  
 方に、色つくりたる女、はたには、紅うこんのきぬ物、上にかちん染の布子、嶋縺子  
 の二つわり、左の方に結び、赤前だれして、桐の引下駄をはきて、たばね牛房に、花  
 柚などさげてかの小家に、はしりよりて、日外の、立嶋のさる物の、質の札は、手も  
 とに御さるか、口鼻にさ、やさける、ころなから笑しく、あれはいかなる女と尋  
 ねける、人の召つかひ、竈近きものと申、それにはよろしき身のまはり、はた織女さ  
 へ給分のつもりあり、爰は半季居のまれなる所かと申せば、昔しと替り、こまか成事  
 まで、御ころのつく事ぞ笑し、あれは、問屋方にはすはと申て、眉目大形なるを、  
 東國西國の、客の寢所さすため抱て、おのがころまかせの、男ぐるひ、小宿を替て  
 あふ事、いたづらの、晝夜に、かぎらず、出ありく事も、おや方の手前をはおず、妊  
 めば、苦もなふ、おろす、衣類は人にもらひ、はした銀も、あるにまかせて、手にも  
 たず、正月著物は、夏秋をしらす賣て、蕎さき酒に替て、三人よれば、大笑ひして、

高麗橋を、わたる事忘れ、佛神に詣でけるにも、置綿ばら緒の雪踏、音高く、道すが  
 らの、一口咄しにも、人の耳をこすりて、夕は夜更て、起されたもしらず、状かさな  
 がら寝入た、鼈甲のさし櫛が、本蔀繪にて、三夕五分で出来るなど、はしたなく申  
 せしは、聞て戀も覺ぬべし、下向もすぐには歸らず、中宿にあかして、物つかふ男を  
 まねき、いやといはぬ程の、御無心を申、世をうかくと暮し、其果は中衆、上荷さ  
 しなど、夫婦となりて、貌たちまち賤しく、前に抱、うしろにおひ、惣領の手を引、  
 小米屋にゆきて計吟味するも、あさまし、自も其女の、出合宿、隠してもしる、事  
 どと、のこらすはなせば、又それに、うつりて、たはけを盡し侍る、此行末何にか、  
 なるべし、廿三の年も、かい暮になりぬ

○野々村 「是非もらひ著物」といふことは、よくわかりませんが、本文の中に、それに關係した事  
 があるから、それでつけたものだらう、と思ひます。「かり衣」は「狩衣」ですか。





○吉田 原本は假名で「かり衣」とあります。

○野々村 「辻堂」はさういふものがあるのか、地名にでもあるのか、これもわかりません。こゝで都で羽織なんかをくれたことのあるやつが、旅芝居の囃子方を遣つてゐるのに會つて、何も口過ぎだから、一ふしお遣りになつては、といふことになつた。「出は」といふのは囃子の出端です。ところがさういふことを遣つてゐる身の程を忘れて、若い女方の役者を誘惑したりした爲に、又そこを追出されてしまつた。「少路」は原本も少いといふ字が書いてありますが、東京で云ふコウヂです。

○三田村 「かり衣」は「和歌吳竹集」に、定家の歌と行平の歌とが擧げてあります。定家の方は、「いづくにかこよひは宿をかり衣日もゆふぐれの峰のあらしに」行平の方は「翁さび人などがめそかりごろもけふばかりとて田鶴も鳴なり」——さうして「さきの歌はたびにて著る衣也、後によめるは狩にきる衣也」と區別してある。こゝのところは旅衣の意味でせう。

○野々村 旅装束ですな。「中津」は豊前にはありますが、外にもありますか。

○服部 存じません。どうも中津まで行つて、直ぐ大阪へ歸つて来るのは妙です。九州には長崎もあれば博多もある。

○林 あの邊へは又後で行つてゐますね。



○服部 辻堂は地名ぢやないでせう。「藤村一角」は何かありますか。

○三田村 わかりません。

○服部 「はやしかたの役者」と申しましたか。

○三田村 さあ、どうでせう。これより後までも、藝者と役者と二つあつて、諸方へ召されて舞を舞つたりするのが藝者、芝居へばかり出て狂言をやるのを役者といふことになつてゐましたがね。

○山崎 長袴は形容ですか。

○三田村 穿いてゐたかも知れませんがね。

○山崎 こゝはたゞ「足もとを定め兼ね」を云ひたい爲に、持出したんぢやありませんか。長袴だと上はどうも素襖でせう。殊に旅廻りですからね。

○林 上下で穿きやしませんか。

○三田村 唄うたひの足許はどういふんですか。

○林 出て行く時でせう。切戸から出て行く。

○山崎 それが素人くさい足取なのでせう。

○林 「浮世少路」は「萬買物重寶記」に出てゐます。「きざみ煙草いろくそろひ」と書いてある。

# 蓮 繁 女



○三田村 「傾城仕送大臣」にも「浮世小路の小宿」といふことが出てゐる。

○鶴岡 「大阪町名考」には

東横堀から西横堀までのところだと出てゐます。

○服部 私の大阪にゐた時にもあつたやうです。

○三田村 淀辰にもありましてらう。

○山崎 はじめの「身のほど」は、人の世話になつてゐる身の程でせうね。

○野々村 「二つわり」はどなたか御存じだらうと思ひ話をしてゐる。「竈近きもの」だ

ます。牛蒡の束に花袖などをさげて、その小家に立寄つてひそく話をしてゐる。「竈近きもの」だ



から、おさんどんみたいたいなものでせう。それにしては身の廻りがいゝやうで、機織女さへ給金の積立てたものがある。こゝは「半季居」半年で代る女は無いか、とこれは乳母の妹に云つたんでせう。昔と違つて、こまかなことまで氣のつかれるのがをかしい。あれは「はすは」といふものでいろ／＼客を取つて浮氣をする。正月著るものは、夏秋を知らずに賣飛ばしてしまふ。高麗橋をわたる」といふのは？

○林 天神様へ行くんでせう。

○野々村 天神詣ですか。「下向」といふのは歸る時でせう。うちへ歸る時も直は歸らずに、何か遣つてゐる。「仲衆」は今いふ仲仕でせうな。――前に云ひ落しましたが、「桐の引下駄」といふのは何ですか。

○服部 齒の無い下駄でせう。桐の下駄はこの頃から流行つたと見えます。下向は神社からの歸り、物つかふ男は金をつかふ男でせうな。

○野々村 御説の通りでせう。物つかふ男は、雑用をさせる男のやうに思ひましたが、やはり金をつかふ男といふ意味の方が、良いと思ひます。

○木村 引は「挽」の方ですか。

○野々村 「二つわり」はどうですか？

○木村 一幅の半分のことぢやありませんか。

○三田村 半幅です。

○林 「紅うこん」？

○木村 紅と鬱金ではまるで違ひますね。

○三田村 重ねて著てゐるんぢやありませんか。

○山崎 ベニウコンといふ一種の色があるんぢやないですか。

○林 こゝはどうしたつて一枚だよ。「たばね牛蒡に花柚」は八百屋の買物か。

○山崎 「立嶋」は著物だけですか。

○野々村 堅縞のことです。今でも彼方では「堅に引く」といふことを「タツニヒク」と云ひます。

○木村 關西語だと「著物」は「キリモノ」でせうな。「質の札」は私の國（陸奥）でも紙でした。

○三田村 よほどいゝところでない、通は使はなかつたですね。

○林 この女は長くゐつてゐるから、金廻りがいゝんでせう。

○服部 天満の天神様へ詣つた歸りに客を取る。「いやといはぬ程の御無心」だから、出せさうな程



度の無心を云ふ。「上荷さし」は仲仕の少し氣の利いたやつでせう。

○山崎 仲仕は今ばかり書くけれども、元來は「仲衆」の方が本當でせうな。

○林 「正月著物は夏秋をしらす……」こゝらはうまいですね。「三人よれば大笑」といふ、この「大笑」は今で云へば猥談のことです。落語の本などにも、「大笑遠慮」など書いた、即ち猥褻の話は避けて載せてないと断つたのがある。

○野々村 大話とも云ひますね。

○服部 「小米屋にゆきて計吟味」——大分こまかいことになりましたな。

○林 「鼈甲のさし櫛が本時繪にて三匁五分で出来る」これはいゝ加減な、利いた風なことを云ふんだね。

○三田村 この終りの書方はうまいですね。

○服部 いつもさう思ふんですが、書出しと止めは實にうまいです。

○山崎 蓮葉女の事は「永代藏」か「胸算用」かにありましたね。

○野々村 これですな、標題の「是非貫ひ著」は。この「衣類は人にもらひ」といふのでつけたものでせう。

○山崎 柿の暖簾は、澁で染めた細暖簾でせう。

○林 この暖簾は布の方ぢやありませんか。

○山崎 この畫には細暖簾が書いてありますね。一體關西では「細暖簾」といふことは云はないやうです。

○仙秀追記 「好色一代女」巻五に、「萬賣帳難波の浦は日本第一の大湊にして、諸國の商人爰に集りぬ。上問屋下問屋敷を知らず。客馳走のため蓮葉女といふ者を拵へ置きぬ、これは飯炊き女の見よげなるが、下に薄綿の小袖、上に紺染の無紋に黒き大幅帯赤前垂、吹鬢の京笄、伽羅の油に固めて細緒の雪踏延の鼻紙を見せ掛け、其の身持それとは隠れなく、随分面の皮厚うして人中を恐れず、尻据ゑてのちよこゝ歩き、びらしやらするが故に此の名を附けぬ。物の宜しからぬを蓮の葉物といふ心なり。——」云々とあつて、以下これらの女の悪性を記してゐる。

一夜の枕物ぐるひ

内證は、挑灯程な火がふつて、大晦日の、空おそろしく、万懸帳埒明ず屋の、世之介



と、しかられながら、留守つかはせて、二階にしのび、く、り戸のなるたび、胸をおさ  
え、耳をふさぎ、今の悲しさ、命ながらへたらば、末の世かたりにもなりなん、扇は  
く、おゑびす、若ゑひすくと、賣聲に、すこし春のこちして、日のはしめ、静  
に、ゆたかに、世に有人の門は、松みどりなして、物もふく、手鞠つけば、羽子板  
の繪も、夫婦子あるを、うらやみ、化想文よむ女、男めつらかに思はる、曆のよみ  
初、姫はじめおかし、人のこゝろも、うき立きのふの事を忘れ、けふも暮ぬ、二日は  
越年にて、或人鞍馬山に誘はれて、一はらといふ、野を行ば、厄はらひの聲、夢違ひ  
の猿の札、寶舟賣など、鯛柁をさして、鬼打豆、宵より扉をしめて、懸がねといへ  
る、坂をすぎて、鰐口の緒にすがれば、物やはらか成手のさはりけるも、はや、戀て  
ふ種と成て、昔し扇見て、爰に籠り、おもひあればわが身よりと、讀し女の事迄も、  
おもひ出されて、心も空に成しに、庭鳥の眞似さす事有、是に目覺、おのくかへる  
折ふし、友とする人にさゝやきて、まことに今宵は、大原の里のさご寝とて、庄屋の

内義娘、又下女下人にかぎらず、老若のわかちもなく、神前の拜殿に、所ならひとて、  
みだりがはしく、うちふして、一夜は、何事をもゆるすとかや、いざ是よりと、臆な  
る清水、岩の陰道、小松をわけて、其里に行て、牛つかむ計の、闇がりまぎれにさけ  
ば、まだいはけなき姿にて、逃まはるもあり、手を捕えられて、斷をいふ女もあり、  
わさとたはれ懸るもあり、しみくと語る風情、ひとりを二人して、論ずる有様もな  
を笑し、七十におよぶ、婆々あどろかせ、或は姨を、のりこえ、主の女房をいやがら  
せ、後にはわけもなく、入組、なくやら、笑ふやら、よろこぶやら、きつ傳えしより、  
おもしろき事にぞ、曉近く一度に、歸るけしきさまく也、竹杖をつきて、腰をか  
じめ、かしら、わたぼうしにつみまはし、人の中をよけて、わき道をゆく、老女あ  
りけり、すこし隔たりてから、足ばやになり、腰のかみも、おのつからのひて、跡  
見かへる面影、石灯籠の光にうつりぬ、世之介不思議におもひつけ、みるに案のこと  
く、廿一二の女、色しろく、髪うるはしく、ものごしやさしく、京にもはづかしから



ず、これはと、くどき様子をさけば、都の人ならば、なをゆるし給へ、我にこゝろを懸し人かぎりなきをうるさく、姿を替て、やうくのがれ侍るにと、かたるに、なをやめがたく、一世の約束して、見すてな、捨まい、未は千とせの、松陰に木隠れ、かゝる所へ、たくましき、若きものゝ、五人七人、又は、三四人爰のかしこの、せんさく、此里の美人がみえぬと、聲くくの、しるは、此女の事にぞありける、身ちいめてなをだまりぬ、此時のこゝろは、むさし野に、かくれし人もやと、事しつまりて、かの女つれて、下賀茂邊にゆきて、或人を頼みてすみぬ、朝の煙かすかに、いたゞきつれたる黒木賣に、見付られてはと、しのふ内こそ、おもしろの花の都近くや

○林 「一夜の枕物ぐるひ」は、物狂ふ如く枕を交すんですか。

○服部 戀愛悲劇枕狂亂、と云つたやうなところでせう。

○林 「挑灯程な火がふつて」といふのは、挑灯をつけてかけ取に歩くことを云つてあるんでせう。





借金が拂ひきれず、留守を使つて二階に隠れてゐて、くゞり戸の音がするたんびに、胸をときめかしてゐる。かういふことも、もつと生きてゐたら、話の種になるかも知れない、と小さくなつてゐるうちに、漸く曉になつて、「扇はく、おゑびす、若ゑびす、」春の賣物が来る。豊かな人の門には、朝早くから禮者が来る、

古製羽子板、丈一尺二寸五分



手鞠をつき、羽子をつく、その羽子板の繪を見ると、殿様奥様、宰相様、縁から落ちたお乳の人といふ左儀長の繪が書いてあるのでも、夫婦に子のあるのを羨み、「化想文よむ女」これは壽言を書いたもの

です。二日は年越で、或人が鞍馬山へ行くのに誘はれた、といふが、これは大阪から行つたのか知らん。さうとすれや大變だ。「夢違ひの猿の札」とか、寶舟とかいふものを賣る。鬼打豆を「鬼は外福は内」と云つて撒く。宵から戸をしめて、「懸がねといへる坂」こんな坂があるんでせうか。

○木村 あるんでせうな。それに戸の懸金をかけた……。

○若樹追記 「懸がね坂」は清少納言の近くて遠きものは鞍馬の九折といつた「七曲り」の一名ではあるまいか。

○鳶魚副書 殿様奥様さんしよ様と子供を添へて描けるは内裏羽子板なるよし。嬉遊笑覽にあり、孰れも胡粉で描いた畫です。

○林 「昔し扇見て爰に籠り」は何です？

○木村 何か故事があるでせう。

○服部 「都名所圖會」を見ましたが、別に無いやうです。

○林 「おゑびす、若ゑびす」はおまじなひで、門に貼る札を賣るのです。「曆のよみ初、姫はじめおかし」

○吉田 世之介がをかしくなつたんですな。

○林 「ひめはじめ」には種々の解釋があるが、延寶三年の「伊勢ごよみ」に「ひめはじめ曆家の説は何なりととかく女の所作をいふなり」といふ狂歌がある。私は此説をとる。原本は未見ないが天明三年板のは「狂歌萬載集」に載つてゐます。



○鳶魚副書 松屋筆記の説が宜しいやうに思ひます。強飯、比目飯とて今世のタキホシの飯をくふことになりてより、ねばりて筈にも土器にも盛事能はざれば、木椀に盛りし故、これを椀飯といふ、武家の饗膳に比目飯を用う、鎌倉年中行事、正月朔日御椀飯也云々、年山紀聞に、資益王日記、明應十年正月一日云、諸社之遙拜之後、三献次御コワ次比目始、海人藻芥曰、公家御膳飯者強飯也、執柄家等如此、姫飯全分略儀也云々といふ引き、曆にひめはじめとあるは、年始に編糎を喰はしむる事なるべしとある。姫始には異説紛々だから、此の説にも異論があらう。けれども祝膳から常の膳に移る處に比目始があるを見棄て難い。

○吉田 いろく説がありますな。元來は飛馬始で馬のことだともいふ。

○三田村 物狂ひは狂言の本を見たら、何か狂ひの装束といふやうなものがあるやうに書いてあつたが、さうですか。

○山崎 別に無いですな。世阿彌時代から物狂とは狂氣して亂れ舞ふ者を指してゐますが、それは普通の装束を用ゐて、たゞ著け方が違ひ、上衣が唐織ならばその右肩を脱ぎ下げる、といふだけの事です。

○林 「枕物狂」といふのがありますね。

○山崎 狂言にあります。年取つた老爺さんが、孫のやうな娘に戀著する。さうして笹の枝に枕をつけて狂亂するんですが、狂言の方では非常に重い習物になつてゐます。それをこゝでは入れ違へて世之介の方が若くつて、對手の方は老女——あとで見ると實は若い美人だつたけれども——にしてゐる。

○三田村 洒落てゐますね。毘沙門様へお籠りするので「庭鳥の眞似」といふのは、夜が明けたことにならなければ歸れないからです。

○林 年越の晩ですか。

○木村 年越の晩です。

○林 何處ですか。

○野々村 鶴岡 江文神社です。

○三田村 土俗學の方では、大原の雜魚寐なんかはどう云つてゐますか。

○鶴岡 亂婚の名残だと云ふんですね。

○野々村 縣祭なんかもさうですな。併しあれも知らないものがうつつかり行つたりすると、ひどい目に會ふらしよ。



○鶴岡 府中のもさうですな。

○木村 「夢違ひの猿の札」は？」

○山崎 夢が悪いと取替へる、つまり「夢違はせ」の札です。

○林 寶船の帆の中に「猿」と書いたのがありますね。これは別なだけども、後には一緒になつてゐる。貞享頃の京都の歳暮と正月を書いた繪本に、神社の境内の露店で、寶船の札を其處で刷つてゐるのを見たことがあります。その次のところで「朧なる清水」は大原の名所ですが、「岩の陰道」といふのは何です？

○木村 普通名詞でせう。

○服部 そこでわざと「朧なる」と逃げて云つたんぢやないですか。

○野々村 朧の清水を固有名詞だとすると、江文神社へ行くまでにはありません。三千院から寂光院へ行く道端にあるのですから。

○林 「ひとりを二人して論ずる」これは二人で争ふんですね。後には寝亂れていろ／＼なことになる。曉近くなつて皆一度に歸る。その中に一人頭を綿帽子に包んで、人の中をよけて行く老女があつた。——これは神社の境内でせうか。石燈籠の光に見返つたところを見ると、非常な美人だつ

た。早速これを口説くと、自分に心を懸ける人が多いんだから、かうやつて姿を變へてゐるのだと云ふ。さう語られると、猶やめられなくなつて、末の約束をして松陰に隠れた。かういふところへ遅しい若者が何人も、この里の美人が見えない、といつて來たのはこの女のことだつた。「むさし野にかくれし人もや」といふのは「武藏野を今日はなやきそ若草の妻もこもれりわれもこもれり」ですか、「伊勢物語」です。「いたゞきつれたる黒木賣」は例の狂言の「いたゞき、や、つれた大原木」から來てゐる。「おもしろの花の都近くや」これも「放下僧」の謡に「おもしろの花の都や……東には祇園清水……」とあるのを持つて來たのです。

○山崎 いつの間にか京都で家を持つてゐるんですね。

○三田村 例の出合宿へころがり込んでゐるんでせう。

○林 あれは君、大阪だよ。だからこの間に何とかなければいけない。

○山崎 先生何處かで工面したんですな。

○里子追記 「おもひあればわが身よりと讀し女の事迄も」は季吟の「菟糞泥赴」の鞍馬寺、奥御前の條に「和泉式部おとこに忘られて貴船にまいりてほたるの飛侍けるを見て、物思へば澤のほたるも我身よりあくがれ出る玉かとぞ見る」とあり、少々上の句が違つてゐますが、これぢやないかと



思ひます。又「朧なる清水」は同書に「寂光院の西にある小池也、又江文の東をいへり、城西の大原野にも朧清水と云所あれど和歌によめるは北山の原野にある也」とあります。例歌もあります。省きます。

○鳶魚副書 爰の「一世の約束して」といふ言葉が面白い。亂脛三本鎗の「私の縁付するまで、お前の御内儀様持たんすまで」といふのなどに對して、此の宣言が興味を惹く。此の書の中、わけて此の場合で考へるよりも、元祿末の情況に對比した方が一層面白いと思ふ。

集禮は五夕の外

年籠の夜、大原の里にて、盗し女に馴初、二十五の六月晦日切に、米櫃は物淋しく、紙帳もやぶれに近き進退、是も置ざりにして、佐渡の國、かな山に望を懸行に、十八里こなた、出雲崎といふ所に、渡り日和を待て、明暮只も居られず、舟宿のあるじを招き、此所のなくさみ女はと、尋ければ、いかに北國のはてなればとて、あなどりたまふな、寺泊といふ所に、傾城町あり、いざ見せ申さばやと、暮方よりそこに行て見

るに、隔子局といふ事もなく、軒まばらなる、板屋に、或は五人三人居なかれて、其さま笑し、ありふし八月十一日の、夕風、はや此所は袷をきるぞかし、嶋をよきともへばこそ、いつれも、紬の品をかへ、金入の襟をかけぬといふ事なし、帯は今織の短さを、無理にうしろにむすび、二布は越後晒赤染にして、其ま、美しき貞にも、是非あしろひを、塗くり、額は、只丸く、さは墨こく、髪はぐるまけに高く、前髪すくなくわけて、水引にて結添、赤ひはな緒の雪踏をはさ、懐のうちより、手をさし入裙を引あげ、ちよこくとありくなりふり、いやながら外に、何もなければ、其中でも見よさがとく也、よしあしのへだてもなく、五夕宛に定め置こそ、正直なれ、爰での人ころし、小金といふ約束して、揚屋といふ事もなく、親方七郎太夫が内に、新しき薄縁敷し、奥の間にやさしくも、屏風引廻して有ける、押繪を見れば、花かたげて、吉野參の人形、板木押の弘法大師、鼠の煙入、鎌倉團右衛門、多門庄左衛門が、連奴、これみな、大津の追分にて、書し物ぞかし、見るに都なつかしく、おもふうちに、亭



主膳をすえける、いま日が暮て、間もなき夜食、先蓋をあけぬれば、小豆食是はおも  
 しろひ、鯖ささみて、穂蓼置合こそ、心にくしと思へば、湯を吞まて、終に香物を出  
 さすすます、女郎は箸をもとらず、上方の事誰がいふて聞しけるぞ、しほらしきと思  
 へば、油火指にてか、げ、それをすぐに、小鬢につけしは、笑はれもせず、腹おしな  
 で、居るに、又あるじの出て、後にひもじにならぬ程、まいれといふ、返事もせず、  
 友とせし人、假寝を引起し、酒事にして、此おかしさを忘るゝ、壁一重あちらにも酒の  
 み懸、六七人聲して、三國一しや、拍子が、あうの、あはぬのと、同じ事のみ、うた  
 ひける程に、亭主に様子さけば、此此上方より、さゝんざと申、小歌が時花きたり、  
 爰元の若ひ衆、いろく、稽古致せども、聲がそろはぬと申侍る、さても世は廣ひ事を、  
 今おもひ合、柴垣踊は、しつてかと尋けるに、夢にもしらずと申、何をいふても、是  
 じやもの、只寝ませうと申、耳組の御座一枚、松竹鶴龜を、そめこみの、もめん夜著、  
 されども枕は二つ出して、さあ、お寐やれと申、こゝろえたと、南かしらに、ひつか

ふり、今やくと待ほとに、君様のあし音して、床近く立ながら、

我江戸にてはじめの高雄に、三十五までふられ、其後も首尾せず、今おもへは惜ひ事  
 哉、この女か、其太夫にて、是程自由にならば、尤おもしろかるまし、昔をおもひ  
 出し、うそ腹たつて、むく起にして、罷歸と、同道の人に、付とゞけ能やうにと頼  
 めば、心得て、あるじに三百、口鼻に百、はたらく女共に、貳百、合六百文蒔ちらせ  
 ば、いづれもおどろき、さても大氣な大じんと、近付に成し女良、袖をかざし、舟  
 ばたまでおくりて、互にみゆる内は、小手招き、京にて出口まで、送らるゝ心知ぞか  
 し、彼女郎舟にのりさまに、私語しは、こなたは日本の地に、居ぬ人じやと申ける、  
 心にかゝれど、今に合點ゆかず





○吉田 「集禮」は三田村さん、よろしく御願します。二十五の六月の晦日に、「紙帳も破れに近き進退」は資財の意味でせうが、「進退」と書いてあります。越後の出雲崎で、舟出の日和を待ちながら、この邊に遊女はゐないかといふと、輕蔑なすつてはいけない、寺泊といふところに遊女町がある、といふので、案内されて行つて見るのに、格子局といふほどの店も無く、その様が都に變つてをかしい。八月十一日といふのに、この邊は寒くつてもう袴を著る。「金入の襟」といふのは縫取でせうな。

○三田村 木村 さうでせう。

○吉田 うれしくはないが、よかれ悪しかれ、田舎者は正直である……。

○野々村 「渡り日和」といふ言葉があるんですね。句讀が上に切つてある。「集禮」は？

○林 集禮は大阪詞で雑用といふさうです。こゝは揚代金の外に、といふ意味でせう。

○三田村 集禮は少しこゝへ書き出して置きました。西鶴は「三代男」には「集禮をといへば花代其外わづかなる諸分」と本字を使つてゐるけれども、外は假名が多く、本字でも字がいろ／＼になつてゐる。「新小夜嵐」に「逆も叶はぬ銀一枚、集禮が何程入る事やら、知らぬが無佛世界なり」また「宮川町の奈良豆腐に置鯉、三十八の干鰯當座漬の浅瓜の香物、此分にて二角の集禮」とこの二つ



は同じ文字ですが、「野傾友三味線」の「比丘尼も理山ぐらゐにかゝれば修禮かけては散茶より高うつく」それから「色道大鑑」に「傾城にもらひ返し又もらひ二重にもらひなど云事有、いづれにても其の賞納めたる男一人して惣方の修禮を出しまかなふ法也……兼約の客來りて許容せずして女郎を取かへす時は賞返し似れとも修禮を出さず、暫時賞たる男より其揚屋へ修禮計り出す法なり」これは「集」が「修」になつてゐる。酒禮入用はお客より取るべし（諸遊芥子鹿子）、「勝手酒禮任太鼓」(蓑張草)武州の品川へ著、爰も色所の名所、晝一步夜二朱とはわづかの酒禮（愛敬昔色好）これらは酒の字で、「甲陽軍鑑」にも「深谷の酒禮」と見えてゐる。「好色由來揃」を見ると、「太夫四十六匁もらひしゆらい外に十六匁天神三十匁もらひ十匁のましかこひ十七匁もらひ七匁」とあつて、端天神にはもらひが無い。この貰ひしゆらいのことは「色道大鑑」に出てゐます。その他「御前義經記」には「あげ錢七匁しゆらいは銀十匁」とあり、「遊女諸事出入書留」には「扶持米之儀一ヶ月ニ二分ツ、遊女商賣しゆらい五匁ツ、取可申約束」とあり、「心中双は氷の朔日」には、「しゆらいも書付あるならば代物遣さん」とあり。「心中一枚繪草紙」には「どじやう汁のしゆらい代」とある。ところでこれはどういふ意味かといふと、「松屋筆記」には「似我蜂物語」を引いて、「しゆらい倒れ」は雑用損のこととしてゐる。「俚言集覽」には大阪言葉で、雑用諸色入用のこととある。「攝揚奇

観」に「色茶屋諸分車」を引いた中に「右は茶代二寸五分なりしを近年三寸に直打上られしはおみきのあがりから也、なれ共日々繁昌する事茶や衆の仕合山衆達のよろこび」とある、この茶代といふのに通ふと思ふ。又同書に「肴も是でよい、さらば算用して見んと懐より小サイ十露盤出シ惣輪臺に何々かまほ一枚二分五厘蝟の足一本五厘焼玉子三分みづからが一分ひやし物白瓜わかね一分五厘酒三度替たを見れば四合もあらん、一匁二分酒にして五分か物、吸物は小さい鱸一きれづ三人に片身は入まい、何か打込んでしゆらい二匁三人の茶代九匁取れば七匁残る、山衆の骨折代が七匁には高い」といふことがある。計上した酒肴の料が一匁二分五厘で、これを暫く二匁と見るといふことによつて、しゆらいが酒肴料であることがわかるでせう。こゝに茶代といふのは、しゆらいと揚代とを兼ねたものだといふことも、七匁残ると計算したので知れる。寺で茶菓を供するのを茶禮と云ふが、これも酒禮でいゝかも知れません。廓で「もらひしゆらい……太夫何匁天神何匁」といふのにも、しゆらいを含んでゐる。席を改めて酒肴を新にする爲に、もらひしゆらいがあるのかと思ひます。もう一つ「美景時繪の松」には「嵯峨の釋迦を天竺から唐へ盗、唐から日本へちよろまかしてわせた時代、是もしゆらい負にまけてまんざらのだゞでもなかつたやら、今に赤梅檀といふ嘘でない事」といふのがある。



○林 今は云ひませんか。

○山崎 云ひませんな。

○三田村 蠟燭代といふのが「膝栗毛」にありましたらう。まああんなやうなものだ。

○林 十八里といふのは出雲崎からですか。「佐渡は四十九里波の上」といふのは、能登からださうです。ね。

○服部 今は汽船で三時間ばかりです。

○林 「嶋をよきとおもへばこそ」は紬の縞ですか。

○三田村 さうです。

○林 金入の襟をかけるといふのは襦袢ですか。

○木村 さうでせう。

○林 さういふものがありますか。僕は始めてお目にかゝるんだが。

○三田村 併し何とも云へない。

○林 繪で見ると、さういふ襟のかゝつてゐるのは、天明以後ですね。

○三田村 襟賣は古くからあります。が、古いものには金入の襟なんかはないでせう。

○林 古いものは無地でせう。二布は越後晒これは木綿でなしに麻地のさらさらしたやつで、特に名物を記したのでせう。「ぐるまげ」は圖を出した方がいゝ。

○三田村 「近世女風俗考」にあります。

○木村 「丸びたひ」は、「女重寶記」に、「額作りやう大額小額丸額瓦燈口摺上額皆人々の産付に應じて大額小顔丸顔長き顔短顔をはからひ作り給ふべし墨はなるほどうすくすべし小顔より上にて引すてけすべし」といふことがある。こゝは田舎の女のこと故にお化粧の下手なことを思は

解 髪 曲



女用訓蒙圖彙所載

せませす。

○吉田 こゝで土地一番の美人の小金といふ遊女に馴染んだが、揚屋などゝいふやうなものも無い。



屏風の押繪を見ると、板木刷の弘法大師、鼠の嫁入、鎌倉園右衛門、多門庄左衛門の連奴——といふのは従者でせう——といふやうな、大津繪にしてあるものばかりである。夜食の蓋を取つて見ると小豆飯、鯖を刻んで穂蓼が置合せてあるので、これは心利いた料理だと思つたが、飯を食つてし

角髻曲之古圖  
角髻曲文字の如くツノク、リワゲ成へし、ゲ、  
のクを一字略せし也(貞享年間の畫に此圖あり)



が何か同じことをうたつてゐる。何だと聞くと、あれは上方からはやつて来たさゝんざといふ小歌で、地元の若い衆が稽古してゐるんだといふ。併し重ねて聞いて見ると、柴垣踊さへ知らないんだから、話にならない。

○野々村 「耳組の御座」といふのは、耳を折つてある莫産でせうな。

○吉田 相方が来るのを待つほどに、こゝは飛ばしちまひませう。世之介は江戸で初代の高尾を三五度まで買ったが、一向首尾してくれなかつた。高尾がこの太夫のやうに自由になつたら、却つて面白いこともないだらう。

○林 「おもしろかるまじ」ですね。活字本はこゝが「ら」になつてゐる。「ら」と「る」では大變意味が違ふ。



「繪分追」書俳撰々淡庵時半  
載所(板年六永寶)

だといふ。その別れて舟へ乗る時に、女郎が「どうもあなたはいつまでも日本の土地にゐるやうな人でない」と云つた、といふんだが、これは際どいところで、あとの筋を賣りましたね。

○木村 豫言者だね。



○吉田 鎌倉團右衛門だの、多門庄左衛門だの、こんなものが大津繪にありませうか。

○三田村 これは供奴でせう。

○吉田 その形容に引張つて來たまでですか。

○三田村 少しお薬が強過ぎるやうだね。

○吉田 多門庄左衛門は元祿の立役者でしたね。

○三田村 鎌倉團右衛門は道化役者です。

○林 「花かたげて吉野參の人形」といふのは？

○木村 藤娘ぢやありませんか。

○林 あれは愛宕參りでせう。

○吉田 どうもこの大津繪の目録は大分怪しい。

○木村 けれども大津繪の沿革と云ふと、きつとこれが引いてありますな。

○山崎 「押繪」といふのは？

○木村 貼交ぜのことです。

○山崎 羽子板の押繪とは違ひますか。

○木村 あれはこれから來てゐるんですね。私どもの職業で「押繪貼」と云へば、屏風、襖などに大きいのを一枚だけ貼るのが押繪貼りといひます。例せば忠臣藏の山科（九段目）の襖が押繪貼りで、す。貼り交ぜはその崩れたのです。

○山崎 「さゝんざ」は「ざざんざ」でせうな。

○林 柴垣のことは嘗て「彗星」に書いたことがあるから、それを加へて置ませう。特にこゝで、「御座一枚」と書いたのは、下は一枚だが枕は二つだといふことを現してゐる。こゝは皆流行おくれのものばかりです。

○若樹追記 明曆より寛文へかけて盛に行はれた柴垣といへる小唄の考證は、柳亭種彦翁が早く其著「還魂紙料」に詳にもせられて、其上に蛇足を加へる必要はない位である。然れども其小唄の文句は「絲竹初心集」寛文四年板）に見えた、

しばがきぶし  
柴垣ノ、しば垣ごしに雪のふり袖ちらと見たふり袖へ雪のふり袖ちらと見た  
の一句を引かれて、扱、後はさまざまの替唱歌ありしかども初は此歌なる故になべて柴垣といへり  
とのみ註せられて其替唱歌は記されてゐない。幸に予の藏に其數節を記した當時の小巻物がある



から、爰に記して世に公にしよう。

先づ其柴垣ぶしといふものは如何なるものかといふと「自慶安至明曆筆記の中、明曆三年の條に此頃北國下部の米搗唄とやらんに柴垣といふことを流布して河原者の業となる」とありて北國の米つき唄であるのを、江戸山の手の奴どもの弄んだのが非常の流行となつたことは、萬治年間刊本「東海道名所記」歌比丘尼を云へる條に「次に柴垣とやらん原は山の手奴どもの踊歌なるを比丘尼にのせてうたふ」とあるのでも知れる。其唄ふさまは前條引くところの明曆三年の古記に續きて「歴々の會合にも強て翫ぶ酒宴遊興の座の見物の上は柴垣といふ唄をうたふに拍子をととり形はむくつき田舎夷が襪繩をもつて口を綴られたる如くに作髭し、座席へ罷出で蓬膚を脱敷きえもいはれぬ輔して肩を打胸をたつき癩癩やむ人の狂せる形勢にて右様左様に覆り息も繼ぎ敢ずあがき俯仰に音を助け手をならしして興す」とあるのや、半井卜養の狂歌集に「ある人のもとへ行けるに主いひけるはみな人の馳走にめいよのけだものを見せんと云ふ何ぞと思ひ侍ればうは髭つり髭天神髭かひらぎの大小さしたる人むくつけたるなりにてするさんしけるいづくの人ぞととへば奴子するがのしば垣をうつこのやの者と聲にくげにいふさぞや上手ならんと皆人所望しければ天下一の不拍子者なりあまりをかかしさにひそかに歌よみぬしのかたへつかはす しば垣をうつの山邊のうつけ者夢にも一つあ

はぬ手拍子」とあるのを見れば大凡其有様が知れる。

擬其流行は明曆よりはやり出て萬治寛文を盛りに延寶天和に至りて廢れしことは、天和二年刊西鶴の「一代男」中越後寺泊の條に「此頃上方よりざんざんと申す小歌がはやり來り爰元の若い衆いろく稽古いたせども聲がそろはぬと申し侍るさても世は廣いことを今思ひ合せ柴垣踊は知つてかと尋ねけるに夢にも知らぬと申す何をいふてもこれぢやもの」とあり、北國の米搗歌が江戸の山手奴に唄はれて流行となり、それが江戸では衰へる頃、又邊鄙の越後邊に「ざんざ」と名を變へてはやり行く徑路が知れて面白い。爰にいふ「ざんざ」といふのは「ざんざんざ、濱松の音はざんざんざ」の歌が取り入れられて居るのから、元唄の柴垣を忘れて終つて、「ざんざんざ」となつたものであらう。又天和三年に書ける俳人三千風の「行脚文集」の一卷、加州金澤の條に「燕樂の加賀節も此時にはやりいで非哀の柴垣早歌は直ぐ廢れてうたふ人更になく」とあることや、元祿七年刊其角撰「句兄弟」に「柴垣うつも老の醉興、神叔」とあるのでも天和頃には廢れたことが證せられる。予の藏する小卷は丈五寸許りの紙に寛文頃の書體もて初めに「見もあかぬ秋のけしきや」次に、「うらつくし」「たんせん」があつて後は皆柴垣ぶしの唱歌と覺える。思ふに當時小唄を習つた人の手控であるのを、後で卷に仕立てたものであらう。而して此手蹟の主は江戸か上方か、今俄に斷



定することは出来ぬ。これより其唱歌を順に記して行かう。

一、おもかけ柴垣として雪のふるよにちらと見たとなん  
これが前に記した「絲竹初心集」の唄と多少の異同があるが、先柴垣節の元唄であらう。

一、めでたくのなにかく若松さまよなんゑたもさかゆるはもしげる、あいのて、つんとく  
此唄は他から柴垣節に取り入れられた祝唄である。

一、けらも、若しゆこひしゆなつてまつこかいにねまりまつたのふもす、今はなかく浮世に、  
あられ申まいよなふ、おんもひのたねや南無妙法、蓮華經きみのふ、おもかけちらあちらと  
計りなあんあいのて

一、我はやれ我はおん國あづまのものたかことしはしめて都へのぼり花のしまばらをひよくり  
くくくくくくとぬめりまわりてあげや町を見たればじよるはなんくあれみたかとりやて  
もせてなしやみをつるてんあけやの中にひくなんあいのて

一、しほはなんどらさあみちくるせんとはいそくなん君はしはしと袖引とむるなん立やんなな、  
くなくんななふかねたる我身かなん、あいのて

一、花にまさりの君もちなから、浮世くるひは、しよたいない事や、いやさはもさ、あふすいした

はま松、それよのふさゝんさ、さくむ故よ、何にもうち□□、ふれく、ふるや妻又いとし

なん、たんとふるつま猶いとしな

此詞の中にさゝんさがあるから、或は「一代男」にいふ越後寺泊のさゝんさといふのは此一節が  
元節として傳はつたのではあるまいか。

一、君の面影、しはかきこしてなん雪の、ふる夜にちらとみたとなん、我身は雪か、氷か霜か、  
いつそきへたかまししやものなん

これが「絲竹初心集」に引く元唄に「我身は雪か、云々の文句が加はつてゐる。

一、君をおもへば身はなると舟あはてこかる身そつらきあいのて

一、逢はまれなりしのんてかうしにたつたれば君も心でかいての御手をさしたあゝいた、しめつ  
ゆるめつあゝさしてしんだがまししやけなあゝいやさとかくかなはぬ浮世哉

一、きのめく、とうげをひよつくりひよひよつくりくひよとぬめり上りてうみつらをみ  
たれはなんく、くくく此あれきいたかぶつてきたどんく、くくく此こつまかぬるか  
がつてんか、拍手さつくとことく浪はつるかいのそにうつ拍手よゝいよい

唄の文句はこれで終つてゐるが、二三行餘白を置いて左の合の手譜を記してゐる。多分柴垣節の



譜であらうと思ふ。其道の方々の御研究を煩はしたい。若しさうだとすれば此巻物は益々此曲を習つた人の手控であることを證するものと言つてよからうと思ふ。

しやみせんのおい手

一つんとんつんつてとんとんとんとんつんつん、テン／＼ツントンツウン、ツンチンチンチンチリテツトン、ツンチンチリテツトンツツトン、テツトン。(「華星」第一年第三號)

○鳶魚副書 子供の時分に老人等が江戸は夕飯が早い、燈をつけて喰ふのは田舎者だといふのを聞きしました。是には色々な事由があるのですが、今日は夕食と夜食を同じに思ふ人もあらうと考へるから、少し云つて置きませう。まあ此處でいふ夕食は今日の晝食と思つて宜しいでせう。武野燭談に「夕飯は暫く休息し、申刻(午後四時)より文談せらるゝ事」堀部金丸遺書に「殿様(淺野長矩)夕御膳被召上、未中刻時(午後二時)傳奏屋敷に御引越被遊候」尾張敬公行狀に「未の刻(午後二時)にも膳を進め」後見草にも「夕御膳出、七ツ時(午後四時)濟」諸分店風にも「も早今日は七つ過であらうが……夕めしいづる」是で大概に夕飯が午後二時見當だつたと知る、夜食は先づ午後八時頃らしい。仰景録に「五つの時計打候と、假令章句の半にても仕舞候様に御意有之、御夜食被召上」是は酒井忠勝のことです、文會雜記に「夜長き時は五ツ時に夜食」是は太宰春臺のことです。時代は違ひ身

分も違ひますけれども、兩人とも午後八時に夜食をして居ります。だが享保世説に

「おそくなるもの、里の夜食と寶生大夫」とある通り、和漢遊女容氣などになると「ねよとの鐘もなりて、奥臺所は夜食時分」是は後夜で午後十二時です。寛文版の吉原袖鏡には、巴といふ遊女につ

して、

過し秋、平産し玉ふ、おつとせいの夜喰ゆるとのさたなり、

京傳の指面草の序(天明六年刊)には、

天と地の轉寢に夜食のかたまりて、萬物を産落せしより……

それが娘節用になると、

そんならとまつたか、アノ夜喰のかたまりが出来たといふのか、

明治になつても久しく或る方面では「夜喰のかたまり」といふ言葉が使用されてをりました。

○三田村 松竹鶴龜の木綿夜著は實際あります。僕は八王子邊で見たことがある。

○林 「南かしら」は南 枕ですぬ。

○三田村 あれは一體北枕が本當の寝方なのです。

○吉田 普通は死んだ時の寝方だから、しないんですね。



○山崎 北枕はこの夏私も経験しましたがね、避暑地で子供達を亂雑に寝かして置いたところが、夜中に起きて見ると、八割ほどの割合で、皆北枕になつてゐる。だからあれが最も自然な寝方なんぞせう。或は磁力の關係ぢやないかとも思ひますがね。

○三田村 坊主ばかりぢやない。「孔子家語」にもさうある。

○野々村 この小豆飯はどういふんですか。

○三田村 御馳走ですね。越中富樫の家で、御馳走の時に小豆飯を出してゐる。

○野々村 氣が利いてゐる、と思つたわけですか。

○三田村 この時分は盛りつけません。

○山崎 油のついた指を小鬢へつけたといふことが、堪へるのに苦しいほど、そんなにかしいでせうか。上方あたりでは、普通の嗜み位になつてゐるんですが……。

○林 それは太夫の標準で見るとからでせう。

○三田村 太夫でなくつても、廓者としてはをかしいでせう。

○吉田 小鬢へつけたばかりでなしに、油皿へ手をつけるといふことが已にかしいでせうな。

○三田村 「はじめの高尾」は種彦の「高尾年代記」に「吾妻物語」の寛永二十年補刻を引いて、十六人の

太夫をあげた中に「四郎右衛門内たかお十五」とあるのが、太夫高尾の名の見えた初めだけれども、これを初代とも定め難いと云つてゐる。二代目が萬治高尾です。

木綿布子もかりの世

干鮭は霜先の薬喰ぞかし、其冬は佐渡が島にも、世を渡る舟なく、出雲崎のあるじをたのみ、魚賣となつて、北國の山々を過こし、今男盛 二十六の春、坂田といふ所にはじめてつきぬ、此浦のけしき、櫻は浪にうつり、誠に花の上漕ぐ、蟹の釣舟と讀しは、此所ぞと、御寺の門前より詠れば、勸進比丘尼聲を揃て、うたひ來れり、是はと立よれば、かちん染の布子に、黒綸子の二つわり、前結びにして、あたまは、何國にても同じ風俗也、元是は、嘉様の事をする身に、あらねど、いつ比よりありやう、猥になして、遊女同前に、相手も定ず、百に二人といふこそ笑し、あれは正しく江戸滅多町にて、しのびちぎりをこめし、清林がつれし、米かみ、其時は菅笠がありくや



うに見しが、はやくも、其身にはなりぬ、とむかしを語る、さて此お姿はと尋けるに、世之介申せしは、遊び盡して胸つかえて、虫こなしに、すこしの商ひすると語り捨て、それより去問屋に、知べありてつけば、此津のはんじやう、諸國のつき合、皆十露盤にて、年おくる人也、亭主のもてなし、おかたのけいはく、とかく金銀の光ぞ有難し、上方のはすは女と、おぼしき者十四五人も、居間に見えわたたりて、其有様笑しなげに、髪ぐるく巻て、口紅粉むささほと塗て、鹿子紋の、袖ちいさき著物に、しゆちんの帯して、いづれなりとも、お目に入ばと、思はれ姿して、客一人に、獨つ、或は十日、廿日、三十日も、逗留のうちは寢道具の、あけおろし、朝夕の給仕、其外腰をうたせ、或時は髭をぬかせ、自由につかひて、立さまに、壹歩とらせば、金めづらしくよろこぶ事也、是皆問屋の、召仕の女にはあらず、銘くに宿を持て有ながら、旅人を見懸てあつまるよし、是をおもふに、此徒津の國有馬の湯女に、替る所なし、異名を、所言葉にて、しやくといへり、人の心をくむといふ事かと、そこの人に問へ共、

子細はしらず、世之介はそこくに、應答はれて、是非もなく、やうく下男をかたらひ、暮方より濱邊に出て、兼而聞及し様子みるに、人の煙らしき者、わざと舟子に、捕えられて、浪の枕をならべ、只しどけなく打とけて後、物をとらせば、とる、やらねば、其通にして歸る、是此所にて、干瓢と申侍る、夕貞を作りて、ひらしやら、靡くといふ事ぞかし、京大坂にありし、惣嫁といふ者に違はじ、其所作はと、尋ける、或は、縁遠き女、又は四十におよび、獨過の口鼻、晝はふせりて、暮より身ごしらえして、古著をぬき捨、脇あけの鼠色、黒き帯にさまをかゆると、はや、暗がりにて、つかむ事ぞかし、住家四五丁は、帷子の上張、置手拭して、跡つけの男を待合、あそこの辻、爰の濱なみに立つくし、夜更ては君か寢巻と、うたひ連て、三藏仁介が夢を覺させ、夜番に戯れ、明方近く馬子に取つき、在郷舟に聲を懸、つとめ數かさなりて、髪も笑しくなり、腰元ぶらつきて、間なく大あくびして、跡より竹杖を引ずるは、とがめる犬の爲ぞかし、見世門も明はなれ、それより、足はやに成て、露次に走入ば、



人の目をしのふこゝろもやさし、小娘は親のため、又は我男を引連、我子を母親にだ  
 かせ、姉は妹を先に立、伯父姪姨の、わかちもなく、死なれぬ命の、難面くて、さり  
 とは悲しく、あさましき事共、聞になを不便なる世や、泪は雨のふる夜は、下駄から  
 かさまても、損料出して、思へばかりのうら店、三十日も、定なく、あそこに隠れ、  
 爰に替へて、家請の機嫌を取、小半酒に兩隣をかたふけ、たばね木の當座買、頓而  
 立さゆる煙なるへし、夜發の輩、一日くらし、月雪のふる事も、盆も正月もしらず

○木村 「霜先」は十月頃ですか。

○野々村 さうでせうな。霜月が十一月ですから……。

○木村 とにかくさういふ時候です。前篇に引續いて、出雲崎の揚屋の主人に頼んで、魚賣になつて  
 北國の山々を越えて二十六の春に坂田といふところへ著いた。今は酒の字が書いてあります。花の  
 上漕ぐ蟹の釣舟」は誰の歌ですか。

○柴田 西行法師の歌ださうですね。「象潟の櫻は浪にうづもれて浪の上こぐ蟹の釣舟」芭蕉も「奥の





細道」にこの歌を引いてゐます。

○木村 「勸進比丘尼」これは例の熊野比丘尼で、賣色をしてゐたらしい。この挿畫にもあり、よくい  
ろくものものに出てゐますから略します。「おりやう」は？

○三田村 お寮でせう。大將分、御寮主といふやうな意味だらうと思ふ。

○木村 減多町は神田の多町ださうです。世之介が曾て契をこめた、その清林がつれてゐた女である。  
「米かみ」といふのは「岡場遊廓考」に、「又或人話に、此比丘尼といふは其初め檜杓を腰に差して、手にび  
んざらを鳴らして歌を唄ひ、米を貰ひ、是を掴み喰ふ故に米嚙比丘尼の名あり、味噌節を持って豆腐  
を買ひ、文庫を抱へ供にゆく、宮地の水茶屋に遣はれ、又は地内を徘徊して錢を貰ひ、其功積り十  
六七にして、どやに出る時に、黒茶すみる茶の木綿を着て頭巾を被る、眉は黒く齒は白し、唇は紅  
く手は荒れたり、中古には加賀笠を被る、今はなし」とありますが、西鶴時分に已にさういふ異名が  
あつたことを知ります。小さい時は菅笠があるくやうであつたが早くも今はその身が勸進兼賣色  
してあるくやうになつたといふので今度はその比丘尼を相手にして、世之介はさんく遊び盡して  
胸につかへて、「蟲こなし」は腹こなしでせう。商賣をすると云つて、比丘尼に別れて、それから知  
合の問屋へ行つた。これは始終算盤をはじいて暮してゐる人である。「おかた」は細君のことです。

○今でも東北の方では、お方といふことを申します。そのお世辭といふのも、金銀の光があればこそ  
である。大阪の蓮葉女などと同じ體のものが、十四五人も居竝んで……。

○仙秀追記 阪田の蓮葉女のごとは、「日本永代藏」卷二、阪田の人情のことをかきたる所に、「……  
都にて蓮葉女といふを所詞にて杓といへる女三十六七人、下に絹物上に木綿の堅縞を着て、大かた  
今織の後帯、これも女がしら有りて指圖をして、客に一人づゝ寝道具あげおろしのために付け置き  
ける……」とある。今の酒田が日本海沿岸の要港として、大阪との交渉が多かつたことが窺はれる。

○林 「笑しなげな」とありますね。

○三田村 をかしいこととせう。

○木村 「鹿子紋」のごとは、「嬉遊笑覽」に箕山の「色道大鑑」を引いて「鹿子紋」のごとが記してある。  
また「一代女」にも、「天色の昔小袖に八重菊の鹿子紋をちらし」とあります。これは挿畫を入れたい  
ですな。——かういふなりをした女達が、思はれさうな姿をしてゐる。客一人に一人づゝ付いて十  
日も二十日も三十日も、逗留のうちはいろく身の廻りの世話をして、別れる時に金の一步も遣れ  
ば非常に喜ぶ。さういふ女は問屋に使つてゐる女でなく、家から通つて来て、旅人の爲に職業婦人  
のやうなことをしてゐるらしい、有馬の湯女と變ることは無い。こゝでは「しやく」と云つてゐる。



○三田村 派出婦だね。

○服部 これが舟に乗ればハシリガネですな。

○若樹追記 松の葉卷二の色香と題する長うたの中に「(前略)女郎とちぎらぬ  
たび人にはよもぎもかさいでたらどまり、おくれたびれならねまるべいとて、  
わさゝのさけをしぬさかい、四の五のつじをいづもさき、おなじながれのさ  
か田のひしやく」云々とあり、本来は柄杓で略して杓といふのであらう。

○林 「米かみ」は小さい弟子でせう。「おりやう」は「風俗文選」の「師の説」に出  
てゐます。「比丘尼の師たるものをお寮といひて、其弟子を米かみとはいふなり」  
とある。

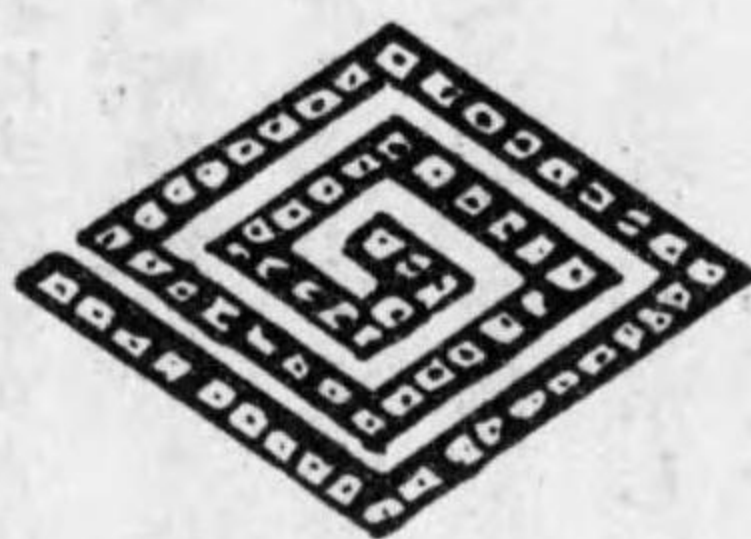
○木村 勸進比丘尼がこんな遠國まで行きますか。

○三田村 その土地にゐます。此方から行くことも行きますが……。

○木村 殊に彼方には出羽の三山がありますからね。

○林 「黒松編子の二つわり」は幅が狭いんでせう。

○木村 「百に二人」



○三田村 五十文だね。

○木村 この書き方は人が悪いですな。

○服部 酒田のことは「人國記」に書いてありませんが、他國の條に記してない淫風のことか書いてあ  
ります。因に人國記に淫風ありと記してあるのは山城石見相模と出羽だけです。

本文略

按る當國は西に向たる國にて、東は限なき深山嶮岨にして、甚寒、雪亦深し、奥州につゞき  
たる大國なれば、所々異なる風もあり、民俗本書に詳なり、海邊の風は所々淫風あり、人の容  
貌言葉、極めて卑劣なり。

○木村 世之介は問屋ではいゝ加減に取扱はれたので、仕方が無くて、その下男と話をして、夕方  
から濱邊に出て見る。かねぐ聞いて居つたが、人の嫁らしいものが、わざと若い者に捕へられて  
直に打とけるやうな様子をしてゐる。金とか品物とかを遣れば取るし、遣らなければそのまゝ歸る、  
これを此處で干瓢といふわけは、「夕顔を作りてひらしやら靡く」といふことだといふ。京阪の惣嫁  
といふのは、江戸でいふ夜鷹のことです。「其所作」これは？

○鶴岡 なりふりでせう。



○木村 脇あけの著物——もつと若いものゝ著るやうな著物を著て、暗がりて目立たないやうななりをして行く。「跡つけの男」は？」

○三田村 林 牛だよ。

○木村 「夜更ては君が寐巻」

○三田村 林 何かあるんでせうね。

○木村 「三藏仁介」は若いものですか。

○服部 張三季四ですな。

○木村 夜が明けると馬子にからかつて見たり、在郷舟——土地の舟に聲をかけたります。彼處は諸國の舟が入つてゐるので、特に土地の舟と斷つたんでせう。竹杖を引ずつて犬に吠えつかれない用心をする。そのうちに方々の町方の店も戸をあけるから、足早に路地に入つて人目を忍ぶのは、すうぐししい中にもまだやさしきみを持つてゐる。「小娘は親のため……」こゝのところがちよつとわかりません。

○林 いろんなものを牛に仕立てゝ行くんだらう。

○吉田 「伯父姪嬢のわかちなく」といふのが、ちよつとわからない。

○三田村 伯父さんが姪の牛太郎を遣つたり、伯母さんが見張をしたりするんぢやないか。

○木村 生きんが爲にはさういふことをしなくてはならない、といふんですかね。

○林 何か謡曲の文句にありますか。

○山崎 「永き命のつれなさ」といふのが「黒塚(安達原)」にあります。

○木村 これは世之介乃至西鶴がさう感じたことなんでせう。雨の降る晩は下駄や傘までも損料を出して借りるやうな、思へば假りの世の中のをうけて借りの裏店と来て、その借りから三十日が来てもきまつた金が入るわけでもない。僅ばかり小半合の酒を買つて、兩鄰を傾ける……。

○服部 機嫌を取るんでせう。

○吉田 騒いで驚かすんぢやありませんか。

○林 驚かせる方でせうな。

○木村 薪から所帯の方の煙へかけて、夜發のやうな輩は一日暮しに過してゐるから、月雪も無ければ、盆も正月も無い。つまり味氣ない年月を送つてゐるといふことでせう。

○野々村 これは「江口」にありますね。

○山崎 あります。「待つ暮もなく、別れ路も嵐吹く。花よ紅葉よ月雪のふる言も、あらよしなや、



思へば假の宿……」謡曲の文句でもなか／＼如才無く使つてゐますな。

○野々村 やつぱりこれは自分が謡をうたつてゐるから、文章を書くにつれて、自然に出て來るんでせう。

○林 少し前のところだけれど、「金銀の光ぞ有難し」と云つて、款待されないから濱へ出るところなにか、うまいですね。

口舌の事ふれ

あらおもしろの、竈神や、おかまの前に松うえてと、すゝしめの鈴をならして、縣御子來たれり、下にはひはた色の襟をかさね、薄衣に、月日の影をうつし、千早や懸帯むすひさげ、うす化粧して、黛こく、髪はちのづからなでさけて、其有様尋常なるは、中／＼お初尾のふんにて成まじ、不思議と人に尋ければ、よき所へこゝろのかよふ事ぞ、あれも、品こそ替れ、のそめば遊女のごとくなれるもの也、それ呼返して、男住

居の宿に入て、其神姿取あかして、あらたに、女體あらはれたり、勝手より、御三寸出せば、次第に酔心、かたじけなき御託宣、ありつる告をまたんとて、其まゝ抱て寢て、覺るや名殘の神樂錢、袖の下よりかよはせて、みる程うつくしく、あは嶋殿の、若も妹かと思はれて、お年はと問へば、うそなしに、今年二十一社、茂りたる森は、おもひ葉となり、世之介二十七の十月、神のお留守さく人もなきぞと、さま／＼くどきてそれより、常陸の國鹿嶋に伴ひ行て、其身も神職となつて、國／＼所／＼に廻る、水戸の本町に入て、是やこなたへ御免なりましよ、過つる二十五日の口舌、天神に、まけさせられ、大じん御腹立あつて、則戀風をふかせ、十七より二十までの、情しらすの娘、りんきつよき、女房を、取ころさんとの御事也、こはひ事哉、はおそろしおもはゞ、文の返事もしたり、こゝろを懸る男によるこばせたがよいと、わけもさこえぬ事ともを、ふれて、さて此所のなくさみ物はと尋ければ、御仕置かたく、定ての遊女といふ事もなくて、物の淋しきあしたは、御藏の靱挽とて、やとはるゝ女の有ぞ



かし、是は人のつかひ下主、隙の時はつかはしける、數百人つれたふて屋敷町を行、其中によきもの見立て、袖をひけども合點せず、なるはいやかたぎ也、しほらしき女は、大形知音ありて、そこにたよりぬ、所く〜にそれ〜の戀は有て、夕暮の歸姿は、前たれ提て、すその摺糠をはらひ、身をもみ、骨ありて、かたちのあしきをうらむ、しぶりかはのむけたる女は、心のまゝ晝寢して、手足もあれず、鼈甲のさし櫛、花の露といふ物もしりて、すこし匂ひをさす事、親方も見ゆるすぞかし、一日三十六文の定め、是さへとりてもどれば也、是にも馴染て、腹むつかしくなると申せは聞捨て、なを奥すぢにさし懸り、八町の目、大宮の、うかれ女を、見盡し、仙臺につきてみれば、此所の傾城町は、いつの比絶て、其跡なつかしく、松嶋や雄嶋の人にも、ぬれて、見むと、身は沖の石、かはく間もなき、下の帯、末の松山腰のかゝむまで、色の道はやめしと、けふ鹽竈の明神に来て、御湯まいらせける人を、みるからこひそめ、社人に近寄、我は鹿嶋より、當社に參、七日の祈念して、歸れとの靈夢にまかせ候と

申せば、いづれも有難き事かなと、様〜いさめけるうちに、かの舞姫、男あるをそゝのかして、色〜ちとせば、女こゝろのはかなく、をしこめられて聲をも得たてず、此悲しさいか計、道ならぬ道ぞと、ひさをかため、泪をなかし、こゝろのまゝにはならずと、かさなればはね返して、命かぎりとかみつさし所へ、男は夜の御番勤しが、夢心に胸さはぎ、宿に盗人の入と見て立歸り、女は科なき有様、世之介を捕えて、とかくは片小鬢刺れて、其夜沙汰なしに、行方しらすなりにき

○鶴岡 この中に書いてあることが、鹿嶋の事ふれのことなんで、世之介はかういふ色を漁る人間だから、「口説の事ふれ」と云つたものでせう。「あらおもしろの竈神や……」かういふ唄をうたつて、縣御子が鈴を鳴らして來ることは、よくいろんなものにあります。「縣御子」といふのは、神社に屬してゐるのが神子、神社に屬さないのが縣神子といふことになつてゐる。その風俗はと見ると、ここに書いてゐるやうななりをしてゐる。「お初尾」といふのは「お初穂」と違ひますか。





○木村 お初穂のことです。それをお初尾ともかいてゐるのが他にもあります。

○林 この時分はいくらです？

○三田村 十二銅でせう。

○鶴岡 それからこの話を人にもしたところが、よく氣がつくことだと云つて、これも様子は違つてゐるけれども、望みがあれば遊女のやうに云ふことを聞くものだ、と云ふので、自分の住ひへ連れて來たんでせう。著てゐるものを脱がしたら、普通の女の姿になつた。早速酒を持つて來て、さゝごとを始め。だんぐり酔が出ると、色つばい御託宣をするやうになつた。いくらか神樂錢を遣つて、見れば見るほど美しい。「あは嶋殿」といふのは、淡嶋明神のことを云つたんでせう。淡嶋明神は大變美しい方で、一説には住吉明神のお妃といふことになつてゐる。白血長血の患があつた爲に嶋流しにされたといふやうな傳説があるのです。二十一の年と二十一社とをかけたので、「茂りたる森」は妙な形容ぢやないかと思ひます。十月は神無月で、神様は皆御留守だから、誰も聞く人は無いよと云つて口説いて、それから常陸の鹿嶋へ連れて行つて、自分も神職になつたといふんですが、神職といふものは、さうむやみに俗人がなれたものでせうか。

○三田村 併し事ふれだつてまあ神職でせう。



○林 いくらか金を納めればいゝんだらう。  
 ○三田村 さうすれや辭令はくれるんでせうね。



おとよぼし

人倫訓蒙圖彙所載

が著すなる、烏帽子狩衣もすその上に掛け、御影あらたに見え給ふ、かたじけなの御事や」かくあ  
 りがたき夢の告、さむるや名残なるらん」などから……………」

○山崎 このはじめの處は、

謡曲の「三輪」を逆に行つた  
 ものです。「三輪」の方は最  
 初の前シテ化身が里の女で  
 それから後シテ本體が神姿  
 になるんですが、これは丁  
 度その逆になつてゐる。文  
 句もところ／＼取つてゐま  
 す。女 姿と三輪の神、千  
 早掛帯引きかへて、唯祝子

○鶴岡 「是やこなたへ御免なりましよ……………」

○林 こゝは事ふれの言葉でせう。

○鶴岡 とりとめも無いやうなことを觸れて歩くんですね。この邊に遊女は無いか、と云つて聞いた  
 ところが、御仕置が堅くつてさういふものは無い。「つかひ下主」は使はれる人ですか。

○三田村 さうです。

○鶴岡 さういふ女がひまな時は、又別な稼ぎに出る。數百人といふと、馬鹿に澤山行くんですね。

○木村 水戸様の御藏だからでせう。

○鶴岡 「なるはいやかたぎ也」

○三田村 厭な風なんでせう。

○鶴岡 しをらしさうな女は大概知人があつて、その方へたよつて行く。夕方歸つて來るところを見  
 ると、前垂をさげて、裾の摺襪などを拂つて、さうして自分の容の醜いのを恨んでゐる。澁皮のむ  
 けた女は、自分の思ふまゝに晝寝して、「花の露」といふのは何か化粧水ですか。

○木村 さうです。江戸の芝明神前の花の露屋の匂ひ油です。

○仙秀追記 「守貞漫稿」第九編、花乃露



一代男に云したるき女の顔花の露にて光らせたる云々、嬉遊笑覽云此花の露と云物藥油にて面につやを出す物也、彼一代男に、芝神明前花の露や十左衛門と見へたり、江戸鹿子に、伽羅油や花のつ

花の露



女用訓蒙圖藥所載

とあり、十左衛門と云はなきをしか云るは戯作也、今世は花の露或は菊の露、又は江戸の水等の名あれども皆同製成べく諸々にて賣之也、製之家により名を異にするのみ也、又今世坊間の婦女用之者稀也、御殿女中には用之者往々有之硝子の小陶に入れて賣之  
また安永六年の評判記「富貴地座位」に、粧具之部卷軸、上上吉、大好庵芝

御當地のはへぬき無類の江戸煉とある。今のクラブ何々とかレイト水とかいふごときものなりし也。



文政頃の花の露容器（染付模様高き一寸八分）

好色一代男

- 林 「薄衣に月日の影をうつし」といふのは？
- 山崎 衣に月日の紋形をつけるんぢやありませんか。
- 林 併しこれは白い衣でせう。
- 服部 何か上へかけるんぢやありませんか。箔摺か何かで……。
- 三田村 縣神子は買へば買へるんですね。けれども十二銅なんかちや取引は出来ない。神樂錢といふのはそれより多いんでせう。「二十一社」は淡嶋の末社が二十一社だからですか。
- 林 何處でも末社は二十一社だらう。
- 木村 それに一つは二十一といふ年が云ひたいので……。
- 林 「茂りたる森はおもひ葉となり」これは慥に怪



しい文句だね。

○三田村 何かそんな文句がありやしないか。

○林 神子は鹿嶋へ置いて行つたのかな。

○三田村 「あは嶋殿」は「線櫻本町育」に「そもく」紀州名草郡加田淡嶋大明神女中様方の腰より下のわづらひは直してやらうとの御誓願」とあり、「野傾色競馬」にも「此道をしり又ふとらぬ女をこれはこれ賀田あはしま大明神にあやかり女」などゝあります。「御仕置かたく」これは御法度「物の淋しきあした」この「あした」は時といふ意味でせう。それから靱挽といふ私娼があつたのです。

○山崎 自分で「わけもきこえぬ」と云つてあるだけに、この事ふれの文句は意味が通じませんな。

○林 「二十五日の口舌、天神にまかせせられ」といふのは、二十五日から天神を出して、それを遊女の天神に持つて行つたんでせう。さうすれば大體文章の意味は通りやしませんか。

○木村 事ふれは「人倫訓蒙圖彙」に詞書があります。毎年鹿島の神前にして行の事あり神必人に詫し給ひて天下の吉凶をしめし給ふとそれを日本にあまねく告しらせける事此神官の役也然ば末世には是をもつて宮雀のすきはひとなして愚夫愚婦をたぶらかすとや了簡して聞べし」とある。この人倫訓蒙の頭書といふものが、中々面白い事をかいてゐます。

○三田村 「しふりかはのむけたる女」これはムクゲを見立てたものぢやないかと思ふ。やうくしぶり皮がむければはやいたづら心（忘花）、「勿體をつけるやつかな、己がしぶり皮がむけたとおもひ」（榮花遊二代男）などがある。或はりを省いても云ふので、「幼よりしぶり皮のむけたるを……」（三代男）「しぶかわのむけたる娘をみては文をつけ」（傾城風流杉盃）などともあります。

○鶴岡 これにも馴染が出来て、子供が出来たらしいといふことを聞捨てにして、奥州筋へかゝつた。

○「八丁の目」といふのは？

○林 途中だらうけれども、わかりません。

○鶴岡 この「大宮」も何處ですかね。さういふ方々の遊女を見盡して、仙臺へ来て見たが、この傾城町はいつの頃からか無くなつてゐる。そこで松嶋や雄嶋まで女を物色して——この邊の形容はうまいですな。鹽竈の明神で探湯を遣つてゐる神子の姿を見て、それに戀して、社人のところへ行つて、自分は鹿嶋から當社へ来て七日の祈念をして歸れ、といふ靈夢によつて來たものと云つた。それは難有いことだといふので、「様々いさめける……」

○林 慰め、もてなす、でせう。

○山崎 神の靈夢を受けた人だから、「いさめる」と云つたんでせう。



- 木村 亭主のあるのをそゝのかしたんですね。
- 鶴岡 これは場所は何處なのかわかりません。
- 野々村 木村 参籠してゐるところぢやありませんか。
- 林 この女の家でせう。
- 三田村 「夜の御番」は社殿の御番に行つてゐるんでせう。
- 林 「命かぎり」は女の方ですね。
- 鶴岡 たうとう世之介は片小鬢を剃り落されて、其夜沙汰なしに、行方も知れずなつてしまつた。
- 服部 これが先生第二回の失策ですな。
- 三田村 この邊の書方はうまい。うぶな女がよく出てゐる。
- 木村 殊に前の神子が墮落したものだつたから、對照して面白いですな。
- 山崎 「女は科なき有様」と唯一句で、ぴしつと云ひ了せてしまふのはえらい。
- 林 その代り自他のわからない弊はありますがね。
- 服部 片小鬢を剃られたら、坊主になつてしまへばいゝのに、存外智慧が無いものだから、この後で弱つてゐる。

- 山崎 こゝは舞臺が東北だけに、「善知鳥」の文句を大分取つてあります。松嶋や小嶋の苦屋うちゆかし「高繩をさし引く汐の、末の松山風荒れて、袖に波越す沖の石、又は干瀉とて、海越なりし里までも、千賀の鹽竈身を焦す」などから……………。
- 野々村 「行方しらすなりにき」なんかもさうですな。



昭和二年十二月十七日印刷  
昭和二年十二月二十日發行

〔輪講好色一代男卷三〕  
（定價金七拾錢）

著者 三田村 玄龍

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地

發行者 和田 利彦

東京市京橋區木挽町三丁目十二番地

印刷者 川 村 清次郎

東京市京橋區木挽町三丁目十二番地

印刷所 川 安 印刷所



發行所

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地  
（電話京橋六五二番）  
（振替口座東京一六一七番）

春陽堂



# 三田村鳶魚氏著作集

國ばら然。だきべるさ述記てしと心中を活生民國は史歴  
 どほ山で込氣意のと。るあが要必るへ替書に新く悉は史  
 著名の來近皆。物たね列き書。白面で致筆の例を料資の  
 。む薦てしと

鳶魚隨筆

定價金貳圓七拾錢  
 送料拾九錢

鳶魚劇談

定價金貳圓八拾錢  
 送料拾八錢

江戸の芝と上野淺草

定價金參圓  
 送料拾八錢

江戸の噂

定價金貳圓九拾錢  
 送料拾八錢

瓦版のはやり唄

定價金貳圓五拾錢  
 送料拾八錢

江戸年中行事

定價金參圓六拾錢  
 送料拾八錢

三田村鳶魚編  
 輪講道中膝栗毛

定價

上編 金參圓五拾錢  
 中編 金參圓貳拾錢  
 下編 金參圓貳拾錢



317  
17



終

